

二五 米の飯を無暗に欲しがる事

山人が飯を欲しがるといふ話ならば、他の諸國に於ても屢耳にする所である。土屋小介君の前年知らせて下さつた話は、東三河の豊川上流の山で、明治の初頃に官林を拂下げて、林の中に小屋を掛けて伐木して居た人が、ある日外の仕事を終つて小屋に戻つて見ると、背の高い髭の長い一人の男が、内に入つて自分の飯を食つて居た。自分の顔を見ても一言の言葉も交へず、したゝか食つてからついと出て往つてしまつた。それから後も時折は來て食つた。物は言はず、又其他には何の害もしなかつたと謂ふ。盗んだと言ふよりも人の物だから食ふべからずと考へて居なかつた様子であつた。

次に鈴木牧之の北越雪譜にある話は、南魚沼郡の池谷村の娘、たゞ一人で家に機を織つて居ると、猿の如くにして顔赤からず頭の毛の長く垂れた大男が、のりりと遣つて來て家の内を覗いた。春の初めのまだ寒い頃で、腰に物を巻付けて機にかゝつて居た爲に、怖ろしいけれども急に遁げることが出來ず、まご／＼とするうちに怪物は勝手元へまはり、竈の傍に往つて、頻りに飯櫃を指さして欲しうな顔をした。兼ねて聞いて居ることもあるので、早速に飯を握つて二つ三つ與へると、嬉しい顔をしてそれを持つて去つた。それから後も一人で居る時は折々來た。山中でも之に出逢つたといふ人が其頃は時々あつたが、一人でも同行者があると決して來なかつたさうである。

又同國中魚沼郡十日町の竹助といふ人夫は、堀之内へ越える山中七里の峠で、夏の或日の午後はこの物に行逢うたことがある。白縮しろぢぢみの荷物を路ばたに卸して、石に腰かけて辨當をつかつて居ると、やはり遣つて來たのが髪かみの長い眼の光る大男で、その髪の毛はなかば白かつたと謂ふ。石の上に置いた焼飯を頻りに指さすので、一つ投げてくれると悦んで食つた。さうして頼みはせぬのに其荷物を背負

つて、池谷村の見えるあたり迄、送つて来てくれたといふ話である。

一九〇

○
そこで改めて考へて見るべきは、山丈山姥が山路に現はれて、木樵山賤の負搬の勞を助けたとか、時としては里にも出て来て、少しづゝの用をしてくれたといふ古くからの言ひ傳へである。是には本來は報酬の豫想があり、恐らくはそれが山人たちの經驗であつた。想山著聞奇集などに詳しく説いた美濃信濃の山々の狗賓餅ひんもち、或は御幣餅五兵衛餅とも稱する串に刺した焼飯の如きも、今では山の神を祭る一方式のやうに考へて居るが、始めて此食物を供へた人の心持は、やはり亦もつと現實的な、山男との妥協方法であつたかも知れぬ。中仙道は美濃の鶉沼驛から北へ三里、武儀郡志津野といふ町で、村續きの林を伐つたときに、是は山といふ程の處でも無く、殊に老木などの覆ひ繁つたものも無い小松林の平山だから狗賓餅にも及ぶまいと思つて、何の祭もせず寄合つて伐り始めると、誰も彼も

の斧の頭がいつの間にか無くなり、道具も悉く紛失して居た。是はいけないと其日は仕事を中止し、改めて狗賓餅をして山の神に御詫びをしたら、失せた道具がぽつ／＼と出て來た。又同じ國苗木領の二つ森山では、文政七八年の頃木を伐出す必要があつて、十月七日に山入して御幣餅を拵へたのはよいが、山の神に上げるのを忘れて、自分たちで皆食つてしまつた。さうすると早速山が荒れ出して、其夜は例の天狗倒しと謂つて、大木を伐倒す音が盛んにした。此時も心付いて再び餅を拵へて詫びたので、漸く無事に濟んだと謂つて居る。此地方では狗賓餅をするには定まつた慣習があつた。先づ村中に沙汰をして老若男女山中に集まり、飯を普通よりはこわく炊ぎ、それを握つて串に刺し、よく焼いてから味噌を附ける。其初穂を五六本、木の葉に載せて清い處に供へて置き、それから一同が心の儘に食ふのである。甚だうまい物だが此餅をこしらへると、天狗が集まつて來ると稱して村内の家では一切焼かぬやうにして居た。故に一名を山小屋餅、江戸近

くの山方では、古風のまゝにしとぎもち黍餅と呼んで居た。今日我々が宗教行爲といふものの中には、まだ動機の分明せぬ例が多い。殊に山奥で天狗の悪戯など、怖れた災厄には、斯ういふ人間味の豊かな解除手段もあつたことを考へると、存外單純な理由が却つて忘却せられ、實驗の漸く稀になるにつれて、無用の雜説が解説を重苦しくした場合を、推測せざるを得ないのである。

○

少なくとも焼飯の香氣には、引寄せられる者が山には居た。食物を供へて悦ぶ者のあることを、里人の方でもよく知つて居た。さうして双方が正直で信を守ることは、昔は別段の努力でも何でも無かつた。従つて先づ與へると働かずに遁げてしまふといふのを、恰かも當世の喰遁げ同様に非難しようとしたならば誤つて居る。以前は山人は何の邪魔もしなければ御幣餅を貰ふことが出来、又それを呉れぬ時にはあばれてもよかつた。特に出て何等かの援助を試みたのは、言はゞ好

意であり又米の味に心酔した者の、やゝ積極的な行動でもあつた。若し私たちの推測を許すならば、それは或は山人の歸化運動の進一步であつたのかも知れぬ。次の章に述べようとする飛驒のオホヒトの場合の如く、人は單に偶然に世話になつた場合にも、謝禮に握り飯を贈れば相手の喜ぶことを知り、相手は又狸兎の類を捕つて来て、之を答禮にして適當なりと考へたのも、やがては異種諸民族間の貿易の起原と同じかつた。斯うして段々に高地の住民が、次第に大日本の貫籍に編入せられて行つたことは、自他の爲に大なる幸福であつた。

○

越後南魚沼の山男が、猿に似て顔赤からずと傳へられるのは、一言の註脚を必要とする。是は單に猿ほどには赤くなかつたといふ迄であつたらしく、普通は之と反對に顔の色が赤かつたといふ例が少なくない。顔ばかりか肌膚全體が赤かつたといふ噂さへ残つて居る。近世の蝦夷地に、所謂フレッシュヤム(赤人)の警を傳へ

た時、多くの東北人にはそれが意外とも響かなかつたのは、古來の惡路王や大竹丸の同類に、赤頭太郎など、稱して赤い大人が、澤山に來たといふ話を信じて居たからである。それが獨り奥羽に限られなかつた證據は、例へば弘仁七年の六月に弘法大師が、始めて高野の靈地を發見した時にも、嚮導をしたといふ山中の異人は、面赤くして長八尺ばかり、青き色の小袖を著たりと、今昔物語には記して居る。眼の迷ひとしても現代になる迄、大人は普通は赤い者のやうに、世間では考へて居た。尤も豊前中津領の山ワロのやうに、男は色青黒しといふ異例も傳へるが、此方には比較すべき傍證が多くない。又赤頭といふのは髮の毛の色で、それが特に目についた場合もあらうが、顔の色の赤いといふのも其以上に多かつたのである。或は平地人との遭遇の際に、興奮して赤くなつたのかといふことも一考せねばならぬが、事實は肌膚の色に別段の光があつて、身長の異常と共に、それが一つの畏怖の種らしかつた。地下の枯骨ばかりから古代人を想定しようとする

る人々に、是非とも知らせて置きたい山人の特質である。

二六 山男が町に出で來りし事

之を要するに山に斯ういふ人たちの居るといふことは、我々の祖先に取つては問題でも又意外でも無かつた。たゞ豊前薩摩の材木業者以上に、意識して彼等と規則立つた交通をする折が乏しかつた爲に、例へば禁止時代の切支丹破天連に對する如く、甚だ精確ならざる風評と誇張とが、附いて廻つたのを遺憾とするばかりである。所謂ヤマワロ(山童)の非常に力强かつたこと、これは全く事實であつたらうと認める。さうして怒ると何をするかわからぬと謂ふのも、亦根據ある推

測であつた。尙又彼等が驚くべく足が達者だと謂つたのも、通例平地の人々と接することを好まぬ以上は、急いで林木の茂みの中に、避け隠れたとすれば不思議は無い。野獸を捕つて食物として居れば、其爲には女でも足が速くなければならぬ。不思議は寧ろ何かといふ場合に、却つて我々に近づかうとする態度の、明瞭に現れて居たことである。しかも屢不幸なる誤解があつて、人が其眞意を酌むことを得ない場合が如何にも多かつた。

東武談叢その他の聞書に見えて居るのは、慶長十四年の四月四日、駿府城内の御殿の庭に、弊衣を著し亂髪にして青蛙を食ふ男、何方よりとも無く現れ来る。住所を問ふに答無く、たゞ手を以て天を指ざしたのは、天から來たとでもいふことかと謂つた。家康は左右の者が之を殺さんとするのを制止し、城外に放さしめたるに、忽ち其行方を知らずとある。此恠人は四肢に指が無かつたともあるが、天を指したといふからは、甚だ信じ難い事であつた。それから又三十年餘り、寛

永十九年の春であつた。土佐では豊永郷の山奥から、山みこと稱する者を高知の城内へつれて來た。年六十ばかりに見える肉附きの逞ましい大男で、一言も物いはず、食を與ふれば何でも食つた。二三日の間留めて置いて後に元の山地へ放ち返したと、當時の幾つかの記録に載せてある。何れも多くの人共に見たのだから、まぼろしとは認め難い話である。殊に「山みこ」といふ語が、既にあの時代の土佐にあつたとすれば、必ずしも稀有の例では無かつた。ミコはどう考へても神に仕へる人のことで、天狗と同じく彼等を山神の使者、若くは代表者の如く見る考が、吉野川上流の村にはあつたことを想像せしめる。

此前後は土著開發に急なる平和時代で、其結果は山と平地との間に、人知らぬ攪亂があつたかと思はれ、山人出現の事例が澤山に報ぜられて居る。尾州名古屋といふやうな繁昌の土地にも、尙何處からか異人が遣つて來て捕へられたと謂つて居る。太い綱で縛つて置いたにも拘はらず、夜の間逃げてしまひ、しかも何

等の報復をもしては行かなかつた。仙人など、違つて存外に智慮も無く、里近くをうろ／＼して居たのを見ると、やはり食物か配偶者か、何か切に求むるものがあつた爲で、半ばはその無意識の衝動から、浮世の風に當ることにはなつたのである。殊にその或者が日向や越後の例の如く、白髪であつたと聽くに至つては、悠々たるかも人生の苦、彼等はた之を免れ得なかつたのである。

○ 名古屋で異人を捕へたといふ話は、視聽實記卷六に出て居る。年代は知れぬが江戸の初期であらう。本文のまゝを次に抄録する。

飯沼林右衛門は廣井に住す。夜話の歸りに僕の云ふには、南の路より御歸になさるべし。それは道遠し。何故にさは云ふかと叱すれば、御迎に来るとき、東光寺の壁の下に、小坊主の一人立ちて在るを見しが、一目見て甚だ戦慄せし故に、かく申す也と答ふ。林右衛門笑ひながら、さあらばいよく／＼行きて見るべしとて行

くに、果して十二三ばかりの小僧あり。物を尋ねれども答へず。之を捉へ引立てんとするに、甚だ力強し。されど林右衛門も強力なれば、漸くに之を引立て、程近ければ我家に連れ歸り、打擲をすれども曾て物を言はず、且つ杖の下痛める體も無く、何とも仕方無ければ、夜明けて再び糺明すべしとて、厩に強く縛り附け置きしに、朝になりて見れば、何處へ行きけん其影も見えざりき。或は云ふ打擲の間に只一聲、あいつと云ひし故、其頃世間にては之を「あいつ小僧」と謂ひたりとなん。

○ 山男が市に通ふといふことは、前の五葉山の獵人の話にもあつたが、是亦諸處に風説する所である。津村正恭の譚海卷十一に、相州箱根に山男と云ふものあり。裸體にて木葉樹皮を衣とし、深山の中に住みて魚を捕ることを業とす。市の立つ日を知りて、之を里に持來りて米に換ふる也。

人馴れて恠しむこと無し。交易の外多言せず。用事終れば去る。其跡を追ひて行く方を知らんとせし人ありけれども、絶壁の路も無き處を、鳥の飛ぶ如くに去る故、終に住所を知ること能はずと謂へり。小田原の城主よりも、人に害を作す者に非ざれば、必ず鐵砲などにて打つことなかれと制せらるゝ故に、敢て驚かさずと云ふ。

斯うあるけれども勿論噂話で、必ずしも小田原の御城下まで、此連中がうろろして居たことを意味するのではあるまい。第一に川魚は此海邊では交易にもならず、木の葉を著て居たら、何ぼでも人馴れて恠まずとは行くまい。たゞ此人中にも一人や二人は居るかも知れぬといふ程度に、輿論が彼等を尋常視して居たことは窺はれる。岩手縣海岸の大槌の町などでも、市の日に言葉の訛りの近在の者で無い男が、毎度出て來て米を買つて行つた。背は高く眼は圓くして黒く光つて居た。町の人が山男だらうと謂つたさうである。併し此から奥地の山々には、今

でも随分と遠國から、炭竈に入つて永く稼いで居る者が多い。言語風采の普通で無いばかりに、一括して之を山人に算入するのは人類學で無い。たゞ市と謂ふ者の本來の成立ちが、名を知らぬ人々と物を言ふ點に於て、農民に取つては珍らしい刺戟であつた故に、例へばエビスと云ふが如き神をさへ祭り、茲に信仰の新しい様式を成長せしめたのである。信州南安曇あづみでは新田の市、北安曇では千國の市などに、暮の市日に限つて山姥が買物に出ると云ふ話があつた。山姥が出ると人が散り、市が終りになるとも言つたが、一方には山姥が支拂に用ゐた錢には、特別の福分があるやうにも信じられた。漸く利欲といふものを實習した市人が、如何に注意深く只の在所の婆様たちを物色して居たかは、想像して見ても面白い。其爲でもあらうか今も昔話の一つに、山姥が三合ほどの徳利を携へて、五升の酒を買ひに來たと云ふのがある。笑つた者は罰せられ、素直に言ふ通りに量つて遣ると、果して際限も無く入つたと謂ひ、又は之にあやかつて金持になつたと謂

ふ。つまりは俵藤太の取れども盡きぬ寶など、系統を同じくした歴史的空想である。

筑前甘木の町の乙子市、即ち十二月最終の市日にも、山姥が出るといふ話が古くからあつた。正徳四年に成る山姥帷子記といふ文に、天正の比下見村の富人大納言なる者の下僕、木綿綿を袋に入れて此日の市に賣りに出で、途中に假睡して市の中に合はなかつた。眼が覺めて見ると袋の綿は既に無く、其代りに一枚の帷子が入つて居た。地籠くして青黄黑白の段染であつた。これも山姥の物と認められて、寶物として二百年を傳へたといふ話を書留めて居る。

それから此序で無いともう他に言ふ折は無いが、繪かきたちだけの今でも遊んで居る空想境に、天狗の酒買ひ狸の酒買ひなどいふ出来事がある。白鳥の徳利や樽に通ひ帳を添へて、下げて飛んで居る場面は後世風だが、由つて來る所は甚

だ久しいやうである。自分は別に今日の酒樽の原型として、瓢の盛に用ゐられた時代を推測し、許由以來の支那の隱君子等が、駒を出したり自分を吸込ませたり終始この單純なる器具を伴侶として居るのには、何か民俗上の理由があるらしいことを、考へて見ようとして居るのであるが、それは廣大なる未解の課題だとしても、少なくとも山の人の生活に、此類の僅かな用具が非常なる便益であり、従つて身を離さずに大切に居るのを見て、我々の祖先までが之を重んじ、何か神性の力でも具ふるかの如く、惚れ込み欲しがり、貰へば寶物にしようとしたことだけは、説かずには居られぬやうな感じがする。落穂餘談といふ書の卷二に、駿河の山に大なる男あり。折々は見る者もあり。鹿猿などを食する由なり。久世太郎右衛門殿物語りに、前方此男出でけるに、腰に何やら附けて居る故、或者近く寄りてそれを取り、還りて見れば高麗の茶碗なり。今に其子の方に持傳へて居ける由。丙寅八月、宇右衛門殿物語り。甚兵衛殿も聞及ぶの由、同坐にて語る

とある。是などは山姥から、褒美に貰つたと云ふのと反して、手も無く山男から掠奪したのであるが、最初どうして此様な品を、彼等が拾ひ取り又之を大事にして居たかを考へると、小説家で無い我々にも、色々な珍らしい光景が空想せられる。例へば盜賊が始末に困つて、山中に隠して置いたとか、大百姓の家が退轉して、荒屋敷になつて居る處へ、のそ／＼と來かゝつた山男が、光るから手に取上げて嗅いだり嘗めたりして居たとしたら、彼等の排外的なる社會にまでも、浸み入らずには置かなかつた異種文明の勢力の大きさの、想像に絶したものであることが考へられる。

曾て舊知の鈴木鼓村君から、又斯んな話を聞いたこともある。鈴木君は磐城亘理郡小鼓村こつみの舊家の出で、それで號を鼓村と謂つて居るが、今から百二十年ほど前の鈴木君の家へ、折々貫ひに來る老人があつた。人と物を言はず、物を遣ると口の中で唱へ言をするが、何を言ふのか少しも聽取れない。飯は兩手に受けて副

へ物も無しに、髻だらけの顔をよごして食ふ。酒は大好きで、常に一斗二三升も入るかと思ふ大瓢箪を携へ來り、それに入れて遣ると直ぐに持つて歸る。衣類は著けて居るが、地合も縞目も見えぬ程汚れて居た。生の貝を貰つて、石の上で碎いて食つたと謂つて、人は戯れに之をアサリ仙人と呼んで居た。何處に住む者とも知れず、七日も十日も連日來るかと思へば、二月も三月も絶えて來ぬこともあつた。歸る際にその跡をつけた者があつたが、山に入ると急に足早になり、忽ちに其影を見失つた。小鼓は阿武隈の川口であつて、山は低いけれども峯は遠く連つて居る。此アサリ仙人は或日の朝、鈴木氏の玄關の柱にその大瓢箪をくゞり附けて置いて、それつ切り永久に遣つて來なくなつた。此話には誤傳が無いとも謂へぬが、瓢箪だけは最近に至るまで、此家の寶物の一つであつた。口は黄金で頗る名瓢であつたと謂ふ。

仙人を見縊びるのは本意で無いが、是くらゐの仙人ならば、まだ山男にも勤ま

と思ふ。只鈴木氏の永年の恩誼は厚かつたにしても、最後に人知れず其瓢をくくり附けて去つたといふ一點だけが、彼等の到底企て得まいと思ふロマンチックであつた。此地方の山人が里に親しみ、山で木小屋の労働者を驚かすに止らず、往々村人の家を訪ねて酒食を求め、村人も亦之を尊敬して居たことは、次のオホヒトの條下に確からしい一例を掲げる。さうすると此も亦同化歸順の一段階であつて、瓢箪の如きも實は餘りに大きいので、何か手頃の容器と只そつと取替へて往つたのかとも考へられる。

二七 山人の通路の事

今日の所謂アルプス連などは、どういふ風にして居るか知らぬが、獵師木挽等の如く度々山奥に野宿せねばならぬ人々は、久しい経験から地形に由つて、不思議の多かりさうな場處を知つて力めて之を避けて居た。折々これは聽く話であるが、深山の谷で奥の行止まりになつて居る處は無事であるが、嶺が開けて背面の方へ通じて居る澤は、夜中に必ず怪事がある。素人は魔所など、謂へば、往來不可能の谷底のやうに考へるけれども、事實は却つて正反對であるといふ。或は又山の高みの草茅の茂みの中に、幽かに路らしいもの、痕跡を見ることがあると、老功な山稼人は避けて小屋を掛けなかつた。即ち山男山女の通路の衝なることを知るからである。國道縣道といふ類の立派な往還でも、それより他に越える路の無い處では、夜更けて別種の旅人の、どや／＼と過行く足音を聽いた。峠の一つ

屋などに住む者は、往々にしてそんな話をする。勿論或場合には耳の迷ひといふこともあり得るが、山人とても他に妨げさへ無くば、向ふの見通される廣路を行く方を、便利としたに相異なるのである。

百五十年ほど前に三州豊橋の町で、深夜に素裸ではだしの大男が、東海道を東に向つて走るのを見た者がある。非常な速足で朝日の揚がる頃には、もう濱名湖の向ふ迄往つて居た。水中に飛込んで魚を捕へ、生のまゝで食つて居るのを見て始めて怪物なることを知つたと、中古著聞集といふ豊橋人の著書には書いてある彼等に出逢つたといふ多くの記事には、偶然であつた場合に限つて、彼等の顔にもやはり驚駭の色を認めたと謂つて居る。畏怖も嫌忌も恐らくは我々以上であつて、従つて必要の無い時には大抵繁み隠れなどから、注意深く平地人の行動を、窺つて居たのであらうと想像する。

菅江眞澄の遊覽記三十二卷の下、北秋田郡の黒瀧の山中で路に迷つた條に、やや山頂とおぼしき處に、横たはる路のかたばかり見えたるに、こは路ありあな嬉しと言へば、案内の者笑ひて、いづこの嶺にも山鬼さんきの路とて、嶺の通路はありけるもの也。此道を行かば又何處とも無く踏迷ひなんとて、尙峯に登る云々とあつた。故伊能嘉矩氏の言には、陸中遠野地方でも山の頂の草原の間に、路らしいもの、痕迹ある處は、山男の往來に當つて居ると稱して、露宿の人が之を避けるのが普通だつたとの話である。阪本天山翁寶曆六年の木曾駒ヶ嶽後一覽記に、前嶽の五六分目、はひ松の中に一夜を明す。此處に止宿のことは村役人人足までも不承知にて、彼是と申すに付き其趣旨を尋ねて見ると、すべて斯様の山尾根先は天狗の通路であつて、樵夫の輩一切夜分は居らぬことにして居ると述べた。然らば村方の者共は、山の平に廻つて止宿せよと申聞け、自分だけ其場に止宿したと記して居る。紀州熊野でも山中に小屋を掛ける人たち、谷の奥が行抜けになつて向

ふ側へ越え得る場所は之を避け、奥の切立つて行詰まりになつた地形を選定するのを常とした。其理由は行抜けの出来る谷合は、通り物の路に當つて居るからだ、南方熊楠氏に告げた者があるさうだ。

さうかと思ふと一方には、人が開いた新道を、どしどし彼等が利用して居る場合もあるらしい。秋田から仙北郡の刈和野へ越える何とか峠には、頂上に一軒家の茶店があつた。秋田の丹生氏が曾て此家に休んだ時、わたし等ももう何處かへ引越したいと、茶屋の主が謂ふので、如何いふわけかと訊ねて見ると、實は夜分になると、毎度のやうに山男が家の前を通る。大平山から目々木の方へ越えて行くらしく、大きな聲で話をしてどやどやと通ることがある。此峠は疑無く山鬼の路らしいから、永くは居られませぬと答へたさうである。遠野でも町から北へ一里ばかり入つて、柏崎の松山の下を曲がる邊に、路が丁字に會して其辻に大きな山神石塔を立て、ある。近い年或人が通行して居ると、山から下りて来る足音が

するのを、何の氣なしに出逢うて見たところが、赤い背の高い眼の怖ろしい、眞裸の山の神であつた。はつと思ふなり飛退いてしまつて、自身はそこに氣絶して倒れた。石塔は即ち其記念の爲であつた。遠野物語にも其話は筆録して置いたが可なり鋭敏な鼻と耳との感覺を持ち、又巧みに人を避けるらしい山人にも、尙人間らしき不注意と不意打とはあつたのである。第一晝間人間の作つて置く路などを、降りて來たのは氣樂過ぎて居た。

○
山鬼さんきと云ふ語は安藝の嚴島などでは、久しく天狗護法の別名の如く考へられて居る。或は三鬼とも書いて其數が三人と解する者もあつたらしい。御山みせんの神聖を守護して不淨の凡俗の之に近づくを戒め、屢々奇異を示して不信者の所業を前以て慎ましめようとして居た。最も普通の不思議は廻廊の板縁の上に、偉大なる足跡を印して衆人に見せることである。或は雪の朝に思ひがけぬ社の屋の上などに

之を見ることもあつた。其次は他の地方で天狗笑ひ又天狗倒しともいふもので、山中茂林の中に異常の物音を發し、或は又意味不明なる人の聲がすることもあつた。之を聽いて畏れをのゝかぬ者の無かつたは尤もである。秋田方面の山鬼ももとは山中の異人の汎稱であつたらしいのが、後には太平山上に常住する者のみをさういふことになり、終には三吉大権現とも書いて、儼然として今は既に神である。しかも佐竹家が卒先して夙に之を崇敬した動機は、すぐれた神通力といふ中にも、特に早道早飛脚で、屢江戸と領地との間に吉凶を報じた奇瑞からであつた。従つて沿道の各地でも今尙三吉様が道中姿で、其邊を通つて居ることがあるやうに考へ、殊に其點を畏敬したのであつた。神を拜む者は是非とも其神の御名を知らなければならぬといふのは、随分古くからの多くの民族の習性であつた。天狗がいよゝ超世間のものと決定してから、太郎坊三尺坊等の名が始めて現れたことは、從來人の注意せざる所であつた。どういふ原因でそんな名前が始まつ

たかを考へて見たら、又多くの新たなる答が出て來ることであらう。

二八 三尺ばかりの大草履の事

また山男の草履を見たといふ話がある。夏冬を打通して碌な衣裳も引掛けて居なかつた者に、履物の沙汰もちとをかしいとは思ふが、妙に其噂が東部日本の方には擴がつて居る。信州木曾邊は殊に之を説く者が多い。出羽の莊内の山中でも柚人が之を拾つて來て、小屋の入口の柱に吊して置くと、夜のうちに持つて還つたか、見えなくなつたなど、謂つて居る。上州の妙義榛名でも獵師木樵の徒、山中で此物を見るときは畏れて之を避けたと、越人關弓録といふ書には説いてある。

其草履の大きさは三四尺、之を山丈の鞋と稱すとある。四隣譚叢などに依れば、信州は千隈川の水源川上村附近の山地に於ても、山姥の杓の話を信じて居る。藤蔓を曲げ樹の皮を以て織つてあるなど、中々手の込んだものゝやうに言ひ傳へて居るのである。大きいと言へばすぐに長三尺の四尺のと、書かなければ承知せぬが、假に之に相應するやうな大足の持主があるにしても、そんな物を履いて山の中があるけたもので無い。我々風情の草履ですらも、野山を盛んに飛廻つて居た時代には、アシナカ(足半)と稱するものを用ゐ、又は單に繩で足の一部分を縛つて、大抵は足一杯の草履は履かなかつた。即ち足趾の付け根の一番力の入る部分を、保護するだけを以て満足したのであつた。

但し此類の話などは、誇張妄誕と言はんよりも、寧ろ幻覺であつたかと思ふ。見たかと思つたら直ぐに無くなつて居たといふ様なもので、確かな出来事では無かつたかと思ふ。色々製法や材料配合の話はあつても、尙何處かで採集して來て

博物館にでも陳列せられぬ限り、自分たちは之を以て一種の昔話として置きたいのである。勿論話にしたところで根原が無ければならぬ。作つて偽を説く者はあつても、さう皆が信ずる筈は無いからである。只話ならば少しづつ成長して行くことはあるかも知れぬ。陸中二戸郡の淨法寺村などで、深山に木を伐る者の發見したといふのは、例のマダの樹の皮で作つた大草履で、其原料のマダの皮が、凡そ馬七頭に付けて戻る位の分量であつたと話して居る。面白いと言つて聽くのはよいが、全體に今ではもう話になり過ぎて居る。それと謂ふのが風説のみ次第に高く、實際に見た出逢つたといふ人の例が、段々少なくなつて行く結果である。

○ 山丈山姥の鞋といふ話は、我々の持つて居た杓掛の習俗、即ち淺草仁王門の格子の木に、無暗な大わらんぢの片足をぶら下げた行爲など、比較して考へて見るべきものかと思ふ。現在各地の街道筋に、杓掛といふ地名のある處には、通例

は道の神の森又は老樹があつて、通行の人馬の古沓などが引掛けてある。或は下から高く投げ上げて占ひをしたといふ地方もあり、又は支那で言ふ鮑魚神同然にその草鞋の喬木の梢に在るを異として、神に祀つた話もある。靈山の麓などでは山の土を遠く持出すことを、山神惡みたまふといふ信仰もあつて、必ず登山の鞋を脱いで行く場處もあるのだが、別に神々に新たなるものを製して、献上する例も弘く行はれて居た。山の神は一本足だと稱して、大きな片足だけを供へる。竈の神は馬であり若くは馬に乗つて來るといふので、新しい馬の沓を上げて居た根原は、恐らく繪馬なども同様に、之を召しておはしませ、之を召して立たせたまへと、神昇降の時刻を暗示する趣旨かと思ふが、勿論信仰は段々に變化して居る殊に路の傍や辻境などに、偉大な履物を作つて置いた動機には、明白に魔よけの意味が籠つて居た。いつの世から始まつたことか知らぬが、斯んな大きな草履を用ゐる者が、此村には居るから馬鹿にしてはいけないといふことを、勝手を知ら

ぬ外來者、即ち鬼や疫病神に知らしめる爲に、一種の示威運動として斯うするやうに、解釋して居る者も少なくは無いのである。敵に對しては詐術も正道と、つひ近頃まで我々も信じて居た。さうかと思ふと海南の小島に於ては、潮に漂うて海の外から、そんな大草履が流れて來たと言つて、恐れ慎んで居た話もあつた。此方が多分一つ前の俗信で、つまりは己の心に欲せざる所を、人に向つて逆用しようとしたものであるらしいのだ。

だから第二の假定説としては、山人の大草履も自分の爲には必要で無いが、世人を畏嚇する目的でわざ／＼之を作り、成るべく見られ易い處に置いたものとも考へられぬことは無い。併し其様な氣の利いた才覺は、つひぞ彼等の舉動から見出したことが無いから、今ではまだそれ迄買被ることが出來ないのである。尤も深山の奥に僅少の平和を樂む者が、いや獵人だの岩魚釣りだの、材木屋だの鑛山

師だの、又用も無い山登りだのと、毎々來て邪魔をすることは鬱陶しいには相違ない。止めて欲しいと思つて居ることは、此方からでも想像することが出來た。そこに單獨の約束が起り法則が生じて、後漸く宗教の形になつて行くことは、何れの民族でも變りはなかつた。しかも冷淡なる第三者の目を以て判ずれば、それは單に一方だけの自問自答であつて、果して此方の讓歩が先方の満足と相當つたか否かは、確かめたわけでは無いのである。深山の中でも特に不思議の多い部分を我々は魔所又は靈地と名けて敢て侵さなかつた。それが自然に原住土人に取つての一種のレザーズとなつたことは、原因とも結果ともどちらとでも解せられる。所謂入らず山に強ひて入つた者の、主觀的な制裁は多様であつた。最も慘酷なるものは空へ引上げて、二つに割いて投げ下すと謂つた。或は何とも知れぬ原因で、躓いたり落ちたりして傷き又は死んだ。永遠に隠されてしまつて、親兄弟を歎かしめることもある。凡そ尋常邑里の生存に於て、豫知すべからざる危難は悉

く、自ら責め深く慎むべき理由として之を認めたのが山民の信仰であつた。

其以外にも豫告警戒の如きものは幾らもあつた。天狗の礫と稱して人の居らぬ方面から、ぱら／＼と大小の石の飛んで來て、夜は山小屋の屋根や壁を打つことがあつた。斯んな場合には山人が我々の來住を好まぬものと解して、早速に引上げて來る者が多かつた。是ばかりは猿さへもするから、或は山人の眞の意趣に出たものと考へてもよいが、それがいつでも合圖に近くして、曾て之によつて傷いたと云ふ者を知らず、石打の奇恠事は都邑の中にも往々にして起り、別に或種の隠れた原因があるらしいから、まだ何とも斷定は出來ない。それから足音や笑ひ聲の類は、偶然に之を聞いた者がおち恐れたといふだけで、固より其様な計畫にあつたことを、立證することは容易で無い。殊に最も有名なる天狗倒しの音響に至つては、果して作者が彼等であつたかといふことさへ、尙疑はなければならぬのであつた。或は狸の惡戯などといふ地方もあるが、本來跡方も無い耳の迷ひだ

から、誰の所業と尋ねて見ようが無い。深夜人定まつてから前の山などで、大きな岩を突落す地響がしたり、又はカキンカキンと斧の音が續いて、やがてワリワリ／＼バサアンと、さも大木を伐り倒すやうな音がする。夜が明けてから其附近を改めて見ると、一枚の草の葉すら亂れては居なかつた、など、謂ふのが最も普通の話で、斯ういふ出来事があるより毎度繰返されると、山が荒れると稱して人が不安を感じ始め、終には其谷を「よくない處」の一つに算へて、避けて入らぬやうにもなるのである。併し多勢が一度に聴いても幻覺はやはり幻覺である。或は同じ物音を共に聴いたと思つても、甲の暗示が乙を誘ひ、又丙の感じを確かにしたのかも知れぬ。東京あたりの町中でも深夜の太鼓馬鹿囃子、或は廣島などでいふバタバタの恠、始めて鐵道の通じた土地で、汽笛汽鐘車の響を狐狸が眞似するといふの類、凡そ異常に強烈な印象を與へたものが、時過ぎて再びまぼろしに浮ぶ例は、實は他にも數限りが無いので、たま／＼山の生活と交渉のある場合ばかり

之を目に見えぬ山の人の神通に托するが如きは、寧ろ我々の想像の力の致す所であつたかも知れぬ。

○

但し是をも我々の實驗の中に算へて、見た出逢つたと云ふのと同じ程度の、信用を博して居る物語は多いのである。少なくとも其二三の例は、後の研究者の爲に残して置く必要があると思ふ。

白河風土記卷四に、鶴生つりぶ（福島縣西白河郡西郷村大字）の奥なる高助と云ふ所の山にては、炭竈に宿する者、時としては鬼魅の恠を聴くことあり。其恠を伐木坊きりきぼう又は小豆磨づきとぎと謂ふ。伐木坊は夜半に斧伐の聲ありて顛木の響を爲す。明くる日其處を見るに何の痕も無し。小豆磨は炭小屋に近づきて、中夜に小豆を磨する音を爲す。其聲サク／＼と云ふ。出で、見るに物無し。よりにて名くといへり。

笈埃隨筆卷一に、途中にて石を撃たるゝこと、土民は天狗の道筋に行きかゝり

たるなりと謂ふ。何れの山にても山神の森とて、大木二三本四五本も茂り覆ひたる如くなる所は其道なりと知ると言へり。佐伯了仙と云ふ人、豊後杵築の産なり今は京に住めり。此人の云ふ。國に在りし時、雉子を打ちに夜込に出でたり。友二三人と共に鳥銃を携へて山道にかゝりしに、左右より石を投げたり。既に當りぬべく覺えて大に驚きたる中に、よく心得たる者押静め、先づ下に坐せしめて言を交へずしてある程に、大石の頭上に飛びちがふばかりにて其響夥しかりしが、暫くして止みければ立上りて行きける。其友の謂ふやう、此は天狗礮と云ふものなり。曾て中るものには非ず。若し中れば必ず病むなり。又此事に遭へる時は必ず獵無し。今夜は歸るには道遠ければ是非なく行くなりと曰ふ。果して其朝は一つも獲物無くして歸りたりといへり。

今齋諧卷二に、加賀金澤の士篠原庄兵衛、或時深山に入り、人跡絶えたる谷川の岸を行きしに、水邊には蘆すき間も無く茂りたるが、其あなたに水を隔て、

人のあまた對坐して談笑する聲聞ゆ。篠原之を恠しみ、自ら行きて見んとすれど水に遮られて渡ることを得ず。連れたる犬にけしかけたれど亦行かず。因つて其犬の四足を捉へ、力を極めて之を蘆原の彼方へ投げたるに、向ふよりも直ちに之を投げ返す。之を見て畏を抱き家に歸る。犬には藥など飲ませたれど、終に死したり。

北越奇談に、神田村に鬼新左衛門と云ふ者あり。殺生を好む。村の十餘町奥なる山神社の下の溪流に水鳥多し。里人は相戒めて之を捕りに行くことなかりしを此男一人雪の中を行き、もち繩を流して鳥を取ること甚だ多し。一夜又行きしも少しも獲物無きことあり。曉に及び、何者とも知れず氷りたる雪の上を歩む音あり。新左衛門小屋の中より之を窺ふに、長一丈餘りの男髪は垂れて眼を蔽へり。新左衛門のすくみ居たるを、小屋の外より箕の如き手を出して攫み上げ、遙かに投げ飛ばしたりと思へば氣絶す。翌朝女房より村長に訴へて谷々を捜せしに、谷

二つ隔て、北の方に新左の雪中に倒れたるを見付けたり。其後生き返り殺生は止めたれど、三年ばかりにして死したりと云ふ。深山の奇測り難し。

次も同じく越後の事であるが、是は會津八一氏の話聞いたのである。妙高山の谷には硫黄の多く産する處があるが、天狗の所有なりとして近頃迄も採りに行く者は無かつた。ところが先年中頸城郡板倉村大字横町の何右衛門とかいふ者、此に眼を著けて十數名の人夫を引率し、此山に入つて谷間に小屋を掛け、日中は硫黄を採取し夜は此小屋に集まつて寝た。或夜深更に容易ならぬ物音がして、小屋も倒れんばかりに震動したので、何右衛門を始め人夫一同も眼をさまし、先づ寒いから火を焚かうとして居ると、戸口の方から顔は赤く白い衣物で背の高い人が入つて來た。皆の者は怖しさに片隅に押しかたまり、蒲團を被つて様子を伺つて居ると、かの者はづか／＼と板の間に上つて來たやうであつたが、其後の事はわからず。夜の明けるのを待つて見れば、かの何右衛門だけは首を後向きに捻ぢ

切られて、つめたくなつて居たと謂ふ。今でも此谷に入つて若し硫黄の一片でも拾はうとする者があれば、必ず峰の上から大聲で、そこ取んなアとどなる者があると謂ひ、又首を捻ぢられるからと少しでも侵す者は無いさうだ。又此邊の村に往つて、天狗などは此世に無いものだとても言はうものなら、必ずこの何右衛門の話聞かされる。此時の人夫の一人に、近い頃まで生きて居たのがあつて、其老人から直接に此話を聞いた者は幾人もあつたのである。

二九 巨人の足跡を崇敬せし事

山人の丈の高いといふことは、古くからの話であつたと見えて、オホヒトと云

ふ別名も久しく行はれて居た。是もオホヒトと謂ふからには、ちつとやそつとでは承知が出来ず、見上げるやうな高い樹の幹に、皮を剥いた痕があつたとか、五六尺もある萱原に、腰から下だけが隠れて居たとか、又は山小屋を跨いでゆさぶつたとか、色々な珍らしい話を傳へて居るかと思ふと、一方には我々と大抵同じくらの、やゝ頑丈なる體格であつたと謂ひ、六尺より低いのは見たことが無いといふ類の、穩健なる記録も亦幾らもあつたので、さのこか何かでゞも無い以上は、其様な大小不揃ひの物が有るわけは無いから、乃ち是も又聞きの場合の掛値であつたことを、想像し得られるのである。

或は雨後の泥の上や、雪中に印した足跡を見て、その偉大なのに驚いたとも傳へられる。中にはあんまりえらい大股であるくのを、やはり大昔から人が想像して居る通り、一本足で飛びまはるのが真らしいと考へて居た人さへあつた。それ等の觀察の精確を缺いて居ることは、論の無い話であるが、もとゞゞ大きいが故

に之を山男の足跡だらうと謂つた人があるとすれば、則ち迷信の原因は別に既に有つたものと認めなければならぬ。

しかも日本は古くから、足跡崇敬の國であつた。神明佛菩薩勇士高僧の多くが岩石などの上に不朽の跡を遺して、永く追慕を受けて居る國であつた。言はゞ山人思想の宗教化といふことには、正しく先蹤があつたのである。我々平民の祖先は、國土平定といふ如き記念すべき大事業を、大古の巨神の功績に歸して居たのみならず、諸國の地方神に隨遂して神徳を宣傳したと云ふ眷屬の小神にも、亦大人の名を附與して其遺跡と口碑とを保存し、更にオホヒトが山に居る異種人の別名なることを知つた場合でも、尙單なる畏怖の念以上のものを以て、其強力の跡を拜まうとして居たのである。

○

東部日本の諸縣に於て、オホヒトと謂つたのは山人のことであつた。勿論大さ

いからの大人であらうが、其大きさが驚くべく一様で無かつた。見た人が次第に少なく、語る人益々多かりし證據である。今に至つては實狀を確かめることも六かしいが、區々の異説は及ぶ限り之を保存して置かねばならぬ。

一 陸奥と出羽との境なる吾妻山の奥に、大人と云ふものあり。蓋し山氣の生ずる所なり。其長一丈五六尺、木の葉を綴りて身を蔽ふ。物言はず笑はず。時々村の人家に入來る。村人之を敬すること神の如く、其爲に酒食を設く。大人は之を食はず、悉く包みて持歸る也。村の子供時として之に戯るゝことあれども、之を怒りて害を作せしことを聞かず。神保甲作の話なり(今齊諧卷四)。

二 上野黒龍山不動寺は、山深く峻岨にして、堂宇其間に在り。魔所と言ひ傳へて恠異甚だ多し。山の主として山大人と云ふものあり。一年に二三度は寺の者之を見る。其の坐するとき膝の高さ三尺ばかりあり。偶々足跡を見るに五六尺もありて、一步に十餘間を隔つと云へり(日東本草圖彙)。

三 高田の大工又兵衛と云ふ者、西山本に雇はれありしが、一夜急用ありて一人山道を還りしに、岨路の引廻りたる處にて圖らずも大人に行逢ひたり。其形裸身にして、長は八尺ばかり、髮肩に垂れ、眼の光星の如く、手に兎一つ提げて靜かに歩み來る。大工驚きて立止れば、かの大人もまた驚けるさまにて立止りしが、遂に物も言はず、路を横ぎりて山に登り走りしとぞ(北越雜記卷十九)。

四 飛驒の山中にオホヒトと云ふものあり。長は九尺ばかりもあるべし。木の葉を綴りて衣とす。物をも言ふにや之を聞きたる人無し。或獵師山深く分け入りて獸多き處を尋ねけるが、思はず此物に逢ひたり。走り來ること飛ぶが如し。遁るべきやうなければせん方無く、せめては斯くもせば助からんかと、飢の用意に持ちたる團飯を取中で、手に載せて差出せしに、取食ひて此上無く悦べる様なり。誠に深山に自ら生れ出でたる者なれば、かの洪荒と云ふ世の例も思ひ出でられてかゝる物食ひたるは始めての事なべしと思はる。暫くありて此者、狐貉夥しく殺

しもて來り與へぬ。團飯の恩に報いる也けり。獵師勞無くして獲物多きことを悦び、それよりは日毎に團飯を包み行き、獸に換へ歸りたり。然るを鄰なる獵師之を恠み、窃に窺ひ置き、深夜に彼に先ち行き待つに、思はず例の者に行逢ひたり。鬼と思ひけん彈こめて打ちたり。打たれて遁げければ獵師も歸りぬ。前の獵師此事を聞きて、あな不便の事やとて、猶山深く尋ね入り峯より下を見たるに、此者谷底に倒れ伏し居たるを、同じ様なる者の傍に添ひたるは介抱するなるべし。若し近づきなば他に打たれし仇を、我に怨みやせんと怖しくなりて止みぬ。斯くて後には死にたるなるべしと、後に此事を人に語りしを、人の傳へたりし也。深き山にはかゝる者も有りけるよとて、細井知慎語れり(視聽草第四集卷六所錄 荻生徂徠手記)。

○ 巨人の足跡を見て感動した例は、決して支那の昔話だけで無い。小田内通敏君

が聽いて來て教へてくれた話には、秋田市楯山に住む丹生某氏、狩が好きで方々をあるき、或年仙北郡神宮寺山の麓の村で、人の家に一泊した處、一つの紙袋に少しの砂を入れたのが、神棚に載せてあつた。主人に其わけを尋ねると、つひ近い頃に、山の下を流れる雄物川の岸で草を刈つて居ると、不意に大きな物音がして、山から飛降りた者がある。よく見たら山男であつた。怖ろしいから茅の蔭に隠れて居て、後に其場所に行て見れば、川原に甚だ大きな足音があつた。あまり珍らしいこと故、村の人たちを呼んで來て見せると、一同は崇敬の餘り、其足跡の砂を取分けて各自の家に持還り、斯うして神棚に上げて置くのだと答へたさうである。

雪の上に大きな足跡を見たといふ話はまだ澤山ある。其二三を擧げて見ると、
一 遠州奥山郷白鞍山は、浦川の水源なり。大峯を通り凡そ四里、山中人跡稀なり。神人住めり。俗に山男と云ふ。雪中に其跡を見て盛大なることを知る。其形

を見る者は早く死す(遠江國風土記傳)。

二 駿河安倍郡腰越村の山中にて、雪の日足跡を見る。大き三尺許、其間九尺ほどづゝ三里ばかり、小路に入りて續けり。又此村の手前に小川あり。此川を一跨ぎに渡りしと覺えしは、其川向二三間にも足跡ありしと。之を山男と謂ひ、稀には其糞を見當ることあるに、鈴竹といふ竹葉を食する故糞中に竹葉ありといふ。右の村々は太井川の川上なり。府中江川町三階屋仁右衛門話したり(甲子夜話)。

三 小蟲倉山、蟲倉明神、公時の母の靈を祭る。因つて阿姥明神社とも云ふ。山姥の住めりしといふ大洞二つあり。近年下の古洞に、山居の僧住せしより、山女之を厭ひ去ると謂ふ。其以前は雪の中に、大なる足跡を見たり(信濃奇勝錄卷二)。

四 文政中、高岡郡大野見郷島の川の山中にて、官より香蕈を作らせたまふとき雪の中に大なる足跡を見る、其跡左のみにて一二間を隔て、又右足跡ばかりの跡ありこれは一つ足と稱し、常にあるものなり。香美郡にもあり(土佐海續編)。

土佐では山人を一般に山爺と呼んで居る。一本足でおまけに眼も一つだと信じ之に遭つたと云ふ人さへあつた。紀州熊野の深山でも一たゝら、又は一本踏鞮なぞ、傳へ、曾て勇士に退治せられた話がある。其他の府縣でも、山に一本足の怪物が居るといふ説は多いが、單に雪の上の足跡から、推測し得べき事では勿論無かつた。即ち實驗以前から、さういふ言ひ傳へが既に有つたので、誤信ながらもそれには又別途の説明があつたのである。

又雪の上では無くとも、足跡の不思議は久しい以前から、我々の祖先を驚かし居た。信州戸隠でも大雨の後、畑などの土に二三尺の足跡のあるのを度々見たと謂ひ、越後の苗場山でも雨後に山上に登れば、長さ尺餘の足跡を見ることがあると、越後野志卷六に書いて居る。播州揖保郡黒崎の荒神山に、萩原孫三郎の墓と傳ふる古塚があつて、石の祠が安置してあつた。嘉永の初年とかに、或人此邊を拓いて畑とした處が、一夜の中に踏荒して、大きな人の足跡があつた。さうし

て其家は全家發狂してしまつたと、西讃府志卷五十一に書いて居る、

仙梅日記には駿州梅ヶ島仙ヶ俣の旅行に於て、一人の案内者が山中さんに話した。雪の後に山男の足跡を見ることがある。二尺ほどの大足である。門野と云ふ處の向ふ山には、山男が石に歩みかけた足かある。岩が凹んで足の形を印して居る。如何ほどの強い力だらうかと謂つたさうである。

斯ういふ人々の心持では、巖石の上に不朽の痕跡を止めることも、大人ならば不可能で無いと思つたのであらうが、親しく實際に就いて看ると、殆ど其全部が山男たちの關與する所では無かつた。大人足跡と云ふ口碑は、既に奈良朝期の常陸風土記大櫛岡の條にもある。丘壟の上に腰かけて大海の蜃を採つて食つたと謂ひ、足跡の長さ四十餘歩、廣さは二十餘歩とある。播磨風土記の多可郡の條にも巨人が南海から北海に歩んだと傳へて、其の踰ゆる迹處、數々沼を成すと記してある。そこで問題は我々の前代の信仰に、別に大人と名けた巨大の靈物があつ

て、誤つて其名を山人に付與したのでは無いかと云ふことになるが、若しさうならば之と共に、足跡に關する畏敬の情までも、移して彼に與へたことになるのである。即ち羽後の農民などが足跡の砂を大切にしたのは、寧ろ山人史末期の一徴候で、事蹟が不明になつた爲に却つて一層之を神祕化したもので無いかとも思はれるのである。

○
現在の大人足跡は中國に最も多く、四國紀州等は之に次ぎ、何れも地名と爲つて各國數十百を算する。併し他の地方とても決して絶無では無く、殊に偉大な足跡は到る處に散在して居るが、其の或ものは單純に之を鬼の足跡とも謂ひ、或は又大太法師の足跡とも唱へて居る。關東の各地でダイラボッチ、若くばデエラ坊の話といふのも是で、多くは所謂足跡に伴なふ傳説である。東京の近郊などにも現に幾つかあるが、全國を通じて大體に之を二様に區別することが出来る。其一

つは前の駿州仙ヶ俣の場合の如く、岩石の上に跡を印したもので、不思議は主として石の如く堅いものを踏み窪めたといふ點に在り、従つて獨り山人のみに非ず古來の偉人勇士例へば辨慶會我五郎と云ふ類の人々までが作者である故に、其形はさして大きく無い。さうして其石は大抵崇拜せられて居る。之に反して第二の種類には、幾らでも大きなものがあつて、従つて鬼物巨靈にのみ托せられる。東京近くでは、京王電車の代田(ダイダ)と云ふ停留場の邊には、昔大太法師が架けたと云ふ橋があり、それから僅か南東に在る足跡は、足形こそしては居るが、面積は約三町歩、内部は元杉林であつたが、今では文化住宅でも建つて居るかも知れぬ。踵に當る處には地下水の露頭があり、其傍には小さな堂も在つた。それから又東南方には二ヶ處の足跡あり、駒澤村に在るものは更に偉大であつた。何れも泉の噴出に起因する窪地で、形状は足跡とも見られぬことは無かつた。上總の鶴枝村で見たものは、小川を隔て、双方の岡の上にあつた。其一つは既に崩れて

居るが、他の一つは約一畝歩、四周の樹林地の中に此だけが土地臺帳で別筆となつて、其分を開いて麥か何か播いてあつた。甲州信州邊のデエラボツチャも、大抵は孤立した湿地であつたが、さうで無い足跡もあるやうである。何にしても附近と地形が違つて、それが略足形をして居れば、大人の跡と謂つたのである。大人は富士を背負うて、何れへか持つて行かうとしたり、又は一夜に大湖を埋めようとして、簣を以て土を運んだ。其簣の目をこぼれた一塊が、あの塚だ此山だといふ話は何處にでもある。つまりは古くからの大話の一形式であるが、注意すべきは悉く水土の工事に關聯し、處によつては山を蹴開き湖水を流し、耕地を作つてくれたなど、傳へ、頗る天地剖柝の神話の面影を忍ばしむるものがある。古い言ひ傳へには相違ないのである。大きい行止まりは加賀國の大人の足跡、東は越中境栗殻山の打越に一つ、次には河北郡木越の光林寺の址といふ田の中、次には能美郡波佐谷はさだにの山の斜面、即ち此國を三足であるいた形である。何れも指の

跡までが分明で、下に岩でもあるものか、田の中ながらそこだけは草も生えない。それから壹岐の島の國分の初丘に在るもの、爪先北に向つて南北に十二間、幅は六間で踵の處が二間、之を大の足跡と呼んで居る。大昔に大といふ人、九州から對馬へ渡らうとして、この中間の島に足を踏立てた。其跡であると謂ふ。少し窪んで水が出て居る。こんな處は附近に多いと壹岐名勝圖誌には記して居る。

大人は九州の南部では、大人彌五郎と稱し、又大人隼人なども謂つて居る。八幡神社の眷屬のやうにも謂へば、又昔此大神に治伐せられた兇賊の如くにも傳へて一定せぬが、一方には山作りや足跡の話もあれば、他の一方には祭の時に、人形に作つて曳きあるいて居る。さうして隼人は又此地方では、征服せられたる先住民の總稱である。隼人が上代の被征服者である爲に、之を大人隼人などと呼んで居るのならば、我々の傳へんと欲する山の人も、オホヒトといふ別名を得た理由が別に尙あつたかも知れぬ。併し考へて行くほど却つて段々に六かしくなる

らしいから、もう此邊で一旦は話を止めて置かう。

三〇 是は日本文化史の未解決の問題なる事

爰で打切つては勿論此研究は不完全なものである。最初自分の企て、居たことは、山近くに住む人々の宗教生活には、意外な現實の影響が強かつたといふことを、論證して見るに在つたのだが、残念ながらそれにはまだ資料が十分で無い。後代の篤學者は尙多くの隠れたるものを發掘することであらう。併したゞ一つはぼ断定してもよいと思ふことは、中世以後の天狗思想の進化に、著しく山人に關する經驗が働いて居たことである。單に眼が光る色が赤い、背が高いなどの外

形のみでは無い。佛法方面の人からは天魔の扱ひを受けつゝも、感情があり好意悪意があつて、或は我々に近づき或は又擯斥し、機嫌にも時々のみらがあつて、氣に向けは義侠的に世話をしてくれるなど、至つて平凡なる人間味の若干をまじへて居ることは、それが純然たる空想の所産で無いことを思はしめる。

彼等は又時として我々から、ひどく遣つゝけられたといふ話もある。天狗の神通を以てして、不覺千萬のやうではあるが、かの杉の皮で鼻を弾かれて、人間といふ者は心にも無いことをするから怖ろしいと謂つた昔話などは、少なくとも曾て人間と彼等との間に、對等の交際があつたと云ふ偶然の證據である。欺くに方法を以てするならば、天狗必ずしも恐るゝに足らずとする考は、我々の世渡りには大切なる教訓であり又激勵であつた。故に或は自分だけは筍を喰ひ、相手には竹を切つて煮て食はせて見たとか、又白い丸石を爐の火で焼いて、餅を喰ひに來た山人に食はせたら、大に苦しんで遁げ去つたとかいふが如き、詐謀を以て之を

征服した物語が、諸國に數多く傳はつて居るので、しかも其古傳の骨子を爲す點が、主として火の美感であり穀物の味であり、何れも山人と名くる此島國の原住民の、殆ど永遠に奪ひ去られた幸福であつたことを考へると、山の人生の古來の不安、即ち時あつて發現する彼等の憤怒、乃至は粗暴を極めた侵掠と誘惑の恐れなども、幾分か自然に近く解釋し得られるかと思はれ、之と相關聯する土地神の信仰に、顯著な特色の認められるのも、畢竟は此民族の歴史が、之を促したといふことになるのである。

最後に尙一つ話が残つて居る。數多ある村里の住民の中で、特別に山の人と懇意にして居たと云ふ者が處々にあつた。其問題だけは述べて置かねばならぬ。天狗の方にも名山靈刹の彼等を佛法の守護者と頼んだもの以外に、尋常民家の人であつて、やはり時としてかの珍客の訪問を受けたと云ふ例は相應にあつた。其中

でも殊に有名なのは、加賀の松任まつたふの餅屋であつたが、たしか越中の高岡にも半分以上似た話があり、其他あの地方には少なくとも世間の噂で、天狗の恩顧を説かるゝ家は多かつたのである。今では殆ど廣告の用にも立たぬか知らぬが、當初は決してうか／＼とした笑話でなかつた。訪問のあるといふ日は前兆があり、又は豫め定まつて居て、一家戒慎して室を淨め、叨りに人を近づけず、しかも出入坐臥飲食ともに、音も無く目にも觸れなかつたことは、他の多くの尊い神々も同じであつた。災害を豫報し作法方式を示し、時あつては憂や迷を抱く者が、此主人を介して神教を永めんとしたことも、想像に難くないのであつた。即ち只一步を進むれば、建久八年の橘兼仲の如く、専門の行者となつて一代を風靡し、若くは近世の野州古峰原こぶかほらのやうに、一派の信仰の中心となるべき境まで來て居たので、しかもその大切なる顯冥兩界の連鎖を爲したものが、單に由緒久しき名物の餠餅であつたことを知るに至つては、心竊かに在來の宗教起原論の研究者が、徒らに

天外の五里霧中に辛苦して居たことを、感ぜざる者は少ないであらう。

始めて人間が神を人の如く想像し得た時代には、食物は今よりも遙かに大なる人生の部分を占めて居た。餅ほどどうまい物は世の中には無いと考へた凡俗は、之を清く製して献上することに由つて、神御満足の御面ざしを、空に描くことを得たらうと思ふ上に、更に其推測を確かめるに足るだけの實驗が、時あつて日常生活の上にも行はれたのである。我々の畏敬して止まなかつた山の人も、米を好み殊に餅の香を愛したのであつた。特別なる交際が餅を以て始まつたと云ふ話は、勿論話であらうが今に方々に傳はつて居る。是を下品だとして顧みないやうな學者は、いつ迄も高天原だけを説いて居るがよい。自分たちは今ある下界の平民の信仰が、如何に發達して斯う迄完成したかを、考へて見ようとするのである。前に話した馬に七駄のマダの皮で、草履を作つて居たといふ陸中淨法寺の村で、或農夫は山に行つて山男に逢つた。晝辨當の餅を珍しがらるから分けて遣ると、非常

に喜んで之を食つた。お前の家ではもう田を打つたか、いやまだ打たぬといふと
 そんだったら打つてやるから何月何日の晩に、三本鍬と一緒に餅を三升ほど搗いて田
 の畔に置けと謂ふ。約の如くにして翌日往つて見ると、餅は無くなり田はよく打
 つてあつたが、大小の田の境も無く一面に打ちのめしてあつた。それからも友だ
 ちになつて、山に行くたびに餅をはたられて困つた。其山男が又彼に向つて、を
 れは誠によい人間だが、かゝアは悪いやつだから 見られないやうに用心せよと
 度々言つて聽かせたといふ話もあつて、六七十年前の出来事のやうに考へられて
 居る(郷土研究一ノ九佐々木君、次も同じ)。此地方の昔話の「山かゝ」は實際怖ろしい。鬼
 婆天あまのじやくのした仕事か、こゝでは皆山かゝの所業になつて居る。

又閉伊郡へいの六角牛山ろっくこうしでは、青笹村の某が山に入つてマダの樹の皮を剥いて居る
 と、ちつと立つて見て居た七尺餘りの男があつた。をれもすけてやるべとさなが
 ら麻を剥ぐやうに、忽ちにしてもう澤山になつた。それから傍の火にあぶつて置

いた餅を指さし、くれといふから承知をすると、無遠慮に皆食つてしまつた。來
 年の今頃も又來るかと聞く故に、後難を恐れてもう來ないと答へると、そんたら
 三升の餅をいつくの晩に、お前の家の庭へ出して置いてくれ、一年中のマダの
 皮を持つて往つて遣るからといふので、是も其通りにして見ると翌年は約束の日
 の夜中に、庭でどしんと大荷物を置く音がした。凡そ馬に二駄ほどのマダの皮で
 あつたと謂ふ。それから以後は毎年同じ日に、此家の庭上で所謂無言貿易は行は
 れたのだが、今の主人の若年の頃から、どうしたものか餅は供へて置いても、マ
 ダの皮は持つて來ぬやうになつたと謂つて居る。

津輕舊事談に弘藩明治一統志其他を引いて、岩木山の大人と親善だつたと記し
 て居るのは、麓の鬼澤村の彌十郎といふ農夫であつて、是は後に自分も亦、大人
 となつて行方を知らずとも傳へられる。彼は最初薪を採りに入つて偶然と懇意に
 なり、角力などを取つて日を暮し、素手で歸つて來ると必ず一夜の中に、二三日

分ほどの薪が家の背戸に積んであつた。或は又大人が彌十郎を助けて、新たに此土地を開發したのだとも謂ひ、又赤倉の谷から水を導いて村の耕地に灌漑したのも、同じ大人の方であつたと稱して、その驚くべき難土木の跡に就いて、逆さ水の傳説を語つて居る。村の名の鬼澤と産土の社の名の鬼ノ宮とは、果して今の口碑の結果であるか、はた原因であるかを決しかねるが、後々までも村に恠力の人^が輩出したと謂ひ、或は又大人が鎮守を約諾して、其代りには五月の節供に菖蒲を葺かず、節分に豆をまくなかれと言つたとあつて、永く正直に此二種の物を用ゐなかつたのは、少なくとも近代の雜説では無かつた證據である。大人が彌十郎の妻に姿を見られたのを理由にして、再び來なくなつたと謂ふのにも、何か仔細がありさうだ。其折記念に遺して去つた蓑笠は鬼ノ宮に、鍬は藤田といふ家に傳はつて居るさうだが、藤田は多分彌十郎の末で、即ち草分けの家であつたらう。南部の方でも三戸郡の荒澤不動に、山男の使つた木臼が傳はつた居ることを、糠

部五郡小史には録して居る。是で樹實を搗いて食つて居たといふ話は疑はしくとも、昔曾て彼等と交際のあつたことを、信じて居たことだけは推察せられる。

津輕の山人は角力を取つたといふのみで、餅をどうしたといふ話は残つてないが、秋田の方へ越えて見ると、此二つの事件も結び附いて居る。是も小田内通敏氏の談であるが、五城目近在の木樵で兼て田舎相撲の心得ある某、或日山で働いて木を負うて立たうとすると、不意に山男が出て來て、相撲を取らうと言つて留めた。そこで荷を再び下に卸して力を角し、一番は先づ彼を投げたら強いと褒めてくれた。二番目にはわざと勝を譲つて還らうとしたが、山男は少し待つてくれと言つて、更に二三人の仲間を連れ來て取らせたので、何れも一番は勝ち一番は負けて別れて來た。それが縁になつて其後も折々出會ふうちに、或時いつ幾日には其方の家へ遊びに行く。家の者を外へ遣り、餅を搗いて待つて居よといふので其通りにして一斗程の餅を振舞ふと、數人の山男が悦んで終日遊んで歸つた。そ

ればよかつたが其後も折々遣つて来て、酒を飲ませろの何のと言ふ爲に、終には其煩しさに堪へず、之を氣に病んで久しく寢て居るやうな事になつた。村の人たちは之を見て、山男など、附合をするのは、何れ身の爲には好くないことだと話し合つて居たさうであるが、若し此樵夫にせめて松任の餅屋ほどの氣働きがあつたら、神経衰弱などにはならず済みさうなものであつた。しかも因縁ばかり永く續いて人に信心の稍薄れた場合に、尋常一樣の手段では元奉仕した神と別れることが難かつたといふことは、屢巫術の家に就て言ひ傳へられた話であつた。餅が化して白い小石に爲つたといふこと、石を火に焼いて怪物を攻めたといふこと、は、共に古くからある物語には相異無いが、山人の場合には二つの話が合體して、あまり毎晩餅ばかり食ひに来るので、後には閉口して白い丸石を圍爐裏に焼き、知らぬ顔をして食はせて見ると、火焰を吹いて飛出して去つたとか、又は其祟りで大水が出たのが年代記にある所の白鬚水だなど、何れも皆一旦の好

意と其後の不本意なる絶縁とを傳説する地方が多いのは、或は何か此方面の信仰の次々の變化を、暗示するものでは無いかと思ふ。

角力によつて山男と近付になつたと言ふのも亦偶然では無かつたやうである。今日中央部以西の日本に於て、矢鱈に人と相撲を取りたがるのは、川童と話がままつて居る。土佐ではシバテンと謂つて芝天狗の略稱かとも考へるが、舉動は殆ど川童と同じである。見た所小兒の如く如何にも非力であるが、勝つと何遍でも今一番といふので、うるさくて仕方が無い。わざと負けて遣るとキ、と嬉しさうに鳴いて、又仲間をうんと喚んで来る。何にしても厄介な相手で、彼等に挑まれた爲に夜どほし角力を取り、後には氣狂のやうになつたといふ話が九州などには多い。それで居て必ずしも狐狸の如く、騙す積りでは無いらしいのである。川童にせよ何にせよ、どうして又斯んな趣意不明なる交渉が始まつたと謂ふか。それには角力其ものゝ歴史を、今少しく遡つて考へる必要があるやうである。朝廷の

相撲召合は七月を例とし、古い年中行事の一つではあつたが、所謂唐制の模倣でもなければ、又皇室専屬の儀式でもなかつたらしい。恐らくは中央文化の或階段に於て、民間の風習を採用して國技とせられたらしいことは、力士の諸國から貢進せられたのを見てもわかる。即ち所謂田舎相撲花相撲の方が、起原に於ては一つ前である。佐渡では今も村々を代表する選手があり名乗を世襲し、會津の新宮権現でも、祭の日には村々の名を帯びた力士が出て、勝つた村では其年は仕合せ好しと信ぜられたこと、歩射馬^{ぶしや}驅けなども同じであつた。乃ち祈願祈禱を専らとし恠力を神授と考へ、部落互ひに技を競ふ他に、常に運勢の強弱ともいふべきものを認めて居たのは、背後に大に頼む所の氏神、里の神の御威光があつた爲で、しかも彼等は信心の未熟に由つて之を傷けんことを畏れて居たのである。時代が漸く進んで全民族の宗教は愈々統一し、小區域の敵愾心などは意味も無いものになつたが、それでも古い名残は今だつて少しは認められる。況んや土地毎に守り

神を別にし、家門にはそれ／＼の信仰があつた際である。豊後の日田の鬼太夫の系圖が、連綿として數百年に及ぶ如く、力の筋を神の筋に歸し、之を以て郷黨の信望を繋ぎ又は集注せしめた者が、即ち神人であつたものかと思はれる。山男に名ざゝれ又川童に角力を挑まれると云ふことは、言ひ換へれば其者が不思議を感じ易く、神祕の前に無我になり易い性質を具へて居たことを意味し、一方には鞍馬の奥僧正谷の貴公子のやうに、試練を経て其天分の恠力を發揮し得るのみならず、他の一方には目に見えぬ世界の紹介者として、亦大に神靈の道を社會に行ふことを得た筈であつたが、不幸にして國は既に事大主義、宣傳萬能の世と爲つて居た爲に、割據したる小盆地の神々は單なる妖恠を以て遇せられ、未だ十分に其感化を實現せぬ前に、有力なる外來の信仰に面して悉く其光を失ひ、神が力を試みるといふ折角の舊方式も、結句無意味な擾亂に過ぎぬことになつたのである。自分の見る所を以てすれば、日本現在の村々の信仰には、根原に新舊の二系統

があつた。朝家の法制にも曾て天神地祇を分たれたが、後の宗像賀茂八幡熊野春日住吉諏訪白山鹿島香取の如く、有效なる組織を以て神人を諸國に派し、次々に新なる若宮今宮を増設して行つたもの、他に、別に土著年久しく住民心を共にして、固く舊來の信仰を保持して居るものがあつた。莊園の創立は以前の郷里生活を一變し、領主は概ね都人士の血と趣味とを嗣いで居た爲に、佛教の側援ある中央の大社を勸請する方に傾いて居たらしく、次第に今まであるものを改造して、例へば式内の古社が殆ど其名を喪失したやうに、力めてこの統一の勢力に迎合したらしいが、之と同時に農民の保守趣味から、新たな社の祭式信仰をも、自分の兼て持つものに引付けた場合が少なくは無かつたらしい。又右の二つの系統が、時としては二つの層を爲し、必ずしも一郷の八幡宮、一村全體の熊野社の威望を傷けることなくして、屋敷や一つの垣内かいとだけで、尙古くからの土地の神に、精誠を致して居た場合も多かつた。頭屋とらやの慣習と鍵取の制度、社家相續の方法等の中

を尋ねると、今とても此差別の微妙なる影響を見出すこと困難ならず、殊に永年に亘つて必ずしも官府の公認する所とならずとも、家から家へ又は母から娘へ、靜かに流れて居た信仰には、別に中斷せられた證跡も無い以上は、古いものが多く傳はると見てよらしい。それといふのが信仰の基礎は生活の自然の要求に在つて、強ひて日月星辰といふが如き莊麗にして物遠い所には心を寄せず、四季朝夕の尋常の幸福を求め、最も平凡なる不安を避けようとして居た結果、夙に祭を申し謹み仕へたのは、主としては山の神荒野の神、又は海川の神を出でなかつたのである。導く人のやはり我仲間であつたことは、或は時代に相應せぬ鄙ぶりを匡し得ない結果になつたか知らぬが、其代りにはなつかしい我々の大昔が、大して小賢しい者の干涉を受けずに、略うぶな形を以て今日までも續いて來た。例へば稚くして山に紛れ入つた姉弟が、その頃の紋様ある四つ身の衣物を著て、ふと親の家に還つて來たやうなものである。之を笑ふが如き心無き人々は、少なくとも

自分たちの同志者の中には居ない。

山人考

大正六年日本歴史地理學會大會講演手稿

一

私が八九年以前から、内々山人の問題を考へて居るといふことを、喜田博士が偶然に發見せられ、かゝる晴れがましき會に出て、それを話しせよと仰せられる。一體これは物ずきに近い事業であつて、固より大正六年やそこいらに、成績を發表する所存を以て、取掛かつたものではありませぬ故に、一時は甚だ當惑し且つ躊躇をしました。併し考へて見れば、是は同時に自分の如き方法を以て進んで、果して結局の解決を得るに足るや否やを、諸先生から批評していただくのに、最も好い機會でもあるので、なまじひに罷り出でたる次第でございます。

現在の我々日本國民が、數多の種族の混成だと云ふことは、實はまだ完全には立證せられたわけでも無いやうであります。私の研究はそれを既に動かぬ通説となつたものとして、乃ち此を發足點と致します。

我が大御門の御祖先が、始めて此島へ御到着なされた時には、國內には既に幾多の先住民が居たと傳へられます。古代の記録に於ては、此等を名けて國つ神と申して居るのであります。其例は日本書紀の神代卷出雲の條に、吾は是れ國つ神、號は脚摩乳、我妻號は手摩乳云々。又高皇產靈神は大物主神に向ひ、汝若し國つ神を以て妻とせば、吾は猶汝疏き心有りとおもはんと仰せられた。神武紀には又臣は是れ國つ神、名を珍彦と曰ふとあり、又同紀吉野の條には、臣は是れ國つ神名を井光と爲すとあります。古事記の方では御迎ひに出た猿田彦神をも、亦國つ

神と記して居ります。

今の神祇令には天神地祇といふ名を存し、地祇は倭名鈔の頃まで、クニツカミ又はクニツヤシロと訓みますが、此二つは等しく神祇官に於て、常典に依つて之を祭ることになつて居まして、奈良朝になりますと、新舊二種族の精神生活は、もはや名殘無く融合したものと認められます。延喜式の神名帳には、國魂郡魂といふ類の、神名から明かに國神に屬すと知らるゝ神々を多く包容して居りながら、天神地祇の區別すらも、既に存置しては居なかつたのであります。

しかも同じ延喜式の、中臣の祓詞を見ますと、尙天津罪と國津罪との區別を認めて居るのです。國津罪とは然らば何を意味するか。古語拾遺には國津罪は國中人民犯す所の罪とのみ申してあるが、それでは之に對する天津罪は、誰の犯す所なるかゞ不明となります。右二通りの犯罪を比較して見ると、一方は串刺重播シキマキ畔放チハハチといふ如く、主として土地占有權の侵害であるに反して、他の一方は父と子

犯すと謂ひ、獸犯すといふやうな無茶なもので、明白に犯罪の性質に文野の差あ
ることが認められ、即ち後者は原住民、國つ神の犯す所であることが解ります。
日本紀景行天皇四十年の詔に、東夷の中蝦夷尤も強し。男女交り居り父子別ち無
し云々ともあります。何れの時代にこの大祓の詞といふものは出来たか。兎に角
に斯る後の世まで口傳へに残つて居たのは、興味多き事實であります。
同じ祝詞の中には、又次のやうな語も見えます。曰く、國中に荒振神等を、神問
はしに問はしたまひ神掃ひに掃ひたまひて云々。アラブルカミタチは又暴神とも
荒神とも書してあり、古語拾遺などには不順鬼神ともあります。此は多分右申す
國つ神の中、殊に強硬に反抗せし部分を、古くからさう謂つて居たものと自分は
考へます。

三

前九年後三年の時代に至つて、漸く完結を告げた所の東征西伐は、要するに國つ
神同化の事業を意味して居たと思ふ。東夷に比べると西國の先住民の方が、問題
が小さかつたやうに見えますが、豊後肥前日向等の風土記に、土蜘蛛退治の記事
の多いことは、常陸陸奥等に譲りませず、更に續日本紀の文武天皇二年の條には
太宰府に勅して豊後の大野、肥後の鞠智、肥前の基肆の三城を修繕せしめられた
記事があります。是は固より海寇の御備へで無いことは、地形を一見なされたら
直ぐにわかります。土蜘蛛には又近畿地方に住した者もありました。攝津風土記
の殘篇にも記事があり、大和には固より國樫(クス)が居りました。國樫と土蜘蛛
とは同じものゝやうに、常陸風土記には記してあります。

北東日本の開拓史を見ますと、時代と共に次々に北に向つて經營の歩を進め、
しかも夷民の末と認むべき者が、今尙南部津輕の兩半島の端の方だけに残つて居
る爲に、通例世人の考では、すべての先住民は壓迫を受けて、北へ北へと引上げ

たやうに見て居ますが、是は單純にそんな心持がするといふのみで、學問上證明を遂げたものでは無いのです。少なくとも京畿以西に居住した異人等は、今では只漠然と、絶滅したやうに看做されて居るが、是も固より何等の根據無き推測であります。

種族の絶滅といふことは、血の混淆乃至は口碑の忘却といふやうな意味でならば、之を想像することが出来るが、實際に殺され盡し又死に絶えたといふことは景行天皇紀に所謂、撃てば則ち草に隠れ追へば則ち山に入るといふ如き状態に在る人民には、到底之を想像することが出来ないのです。播磨風土記を見ると、神前郡大川内、同じく湯川の二處に、異俗人二十許口ありとあつて、地名辭書には之を今日の寺前長谷二村の邊に考定して居ます。即ち汽車が姫路に近づかうとして渡る所の、今日市川と稱する川の上流であつて、實は斯く申す私などもその至つて近くの村に生れました。和銅養老の交まで、此通り風俗を異にする人民が、

その邊には居たのであります。

右に謂ふ異俗人は、果して如何なる種類に屬するかは不明であるが、新撰姓氏錄卷の五、右京皇別佐伯直の條を見ると、此家の祖先とする御諸別命、成務天皇の御宇に播磨の此地方に於て、川上より菜の葉の流れ下るを見て民住むと知り、求め出し之を領して部民と爲す云々とあつて、或は其御世から引續いて、同じ者の末であつたかも知れませぬ。

此佐伯部は、自ら蝦夷の俘の神宮に献ぜられ、後に播磨安藝伊豫讃岐及び阿波の五國に、配置せられた者の子孫なりと稱したといふことで、即ち景行天皇紀五十年の記事とは符合しますが、此と姓氏錄と二つの記録は、共に佐伯氏の録進に據られたものと見えますから、此一致を以て強い證據とするのは當りませぬ。恐らくは釋日本紀に引用する曆録の、佐祈毘(叫び)が佐伯と訛つたといふ言傳へと共に、一箇の古い説明傳説と見るべきものでありましよう。

サヘキの名稱は、多分は障礙といふ意味で、日本語だらうと思ひます。佐伯の住したのには、勿論上に掲げた五箇國には止りませぬが、果して彼等の言の通り、蝦夷と種を同じくするか否かは、此等の書物以外の材料を集めて後に、平靜に論證する必要があるのであります。

四

國郡の境を定めたまふといふ事は、古くは成務天皇の條、又允恭天皇の御時にもありました。是も亦姓氏錄に阪合部朝臣、仰せを受けて境を定めたともあります。阪合は境のことで、阪戸阪手阪梨(阪足)などと共に、中古以前からの郷の名里の名にあります。今日の境の村と村との堺を劃するに反して、昔は山地と平野との境、即ち國つ神の領土と、天つ神の領土との、境を定めることを意味したかと思ひます。高野山の弘法大師などが、獵人の手から靈山の地を乞ひ受けたな

ど、いふ昔話は、恐らくは此事情を反映するものであらうと考へます。古い伽藍の地主神が、獵人の形で案内をせられ、又留まつて守護したまふといふ縁起は、高野だけでは決して無いのであります。

天武天皇紀の吉野行幸の條に、獺者二十餘人云々、又は獺者之首など、あるのは、國樸のことでありましよう。國樸は應神紀に、其爲人甚淳朴也など、もありまして、佐伯とは本來同じ種族で無いやうに思はれます。北山抄江次第の時代を経て、それよりも又遙か後代まで名目を存して居た、新春朝廷の國栖の奏は、最初には實際此者が山を出で、來り仕へ、御贄を献じたのに始まるのであります。延喜式の宮内式には、諸の節會の時、國栖十二人笛工五人、合せて十七人を定めたとあります。古注には笛工の中の二人のみが、山城綴喜郡に在りとあります。故に、他の十五人は年々現實に、もとは吉野の奥から召されたものでありましよう。延喜式の頃までは如何かと思ひますが、現に神龜三年には、召出されたとい

ふ記録が残つて居るのであります。

又平野神社の四座御祭、園神三座の祭などに、出で、仕へた山人といふ者も、元は同じく大和の國栖であつたらうと思ひます。山人が庭火の役を勤めたことは、江次第にも見えて居る。祭の折に賢木を執つて神人に渡す役を、元は山人が仕へ申したといふことは、尤も注意を要する點かと心得ます。

ワキモコガアナシノ山ノ山人ト人モ見ルカニ山カツラセヨ

是は後代の神樂歌で、衛士が昔の山人の役を勤めるやうになつてから、用ゐられたものと思ひます。ワキモコガはマキムクノの訛り、纏向穴師は三輪の東に峙つ高山で、大和北部の平野に近く、多分は朝家の思召に基いて、此山にも一時國樸人の住んで居たのは、御式典に出仕する便宜の爲かと察しられます。

然らば何が故に右の如き嚴重の御祭に、山人如きが出て仕へることであつたか。此は六かしい問題で、同時に又山人史の研究の、重要な鍵でもあるやうに自分

のみは感じて居る。山人の參列は只の朝廷の體裁裝飾で無く、或は山から神靈を御降し申す爲に、缺くべからざる方式では無かつたか。神樂歌の穴師の山は、勿論後に普通の人を代用してから、山かづらをさせて山人と見ようといふ點に、新たな興味を生じたものですが、古今集には又大歌所の執り物の歌としてあつて、山人の手に持つ櫛の枝に、何か信仰上の意味がありさうに見えるのであります。

五

山人といふ語は、此通り起原の年久しいものであります。自分の推測としては、上古史上の國津神が末二つに分れ、大半は里に下つて常民に混同し、残りは山に入り又は山に留まつて、山人と呼ばれたと見るのですが、後世に至つては次第に此名稱を、用ゐる者が無くなつて、却つて仙といふ字をヤマビトと訓ませて居るのであります。

自分が近世謂ふ所の山男山女・山童山姫・山丈山姥などを總括して、假に山人と申して居るのは、必ずしも無理な斷定からではありません。單に便宜上この古語を復活して使つて見た迄であります。昔の山人の中で、威力に強ひられ乃至は下され物を慕うて、遙に京へ出て來た者は、勿論少數であつたでしょう。然らば其残りの舊弊な多數は、行く／＼如何に成り行いたであらうか。是からが實は私人の、考へて見ようとした問題でありました。

自分は先づ第一に、中世の鬼の話に注意をして見ました。オニに鬼の漢字を充てたのは随分古いことでもあります。其結果支那から入つた陰陽道の思想がこれと合體して、今昔物語の中の多くの鬼などは、人の形を具へたり具へなかつたり、孤立獨往して種々の奇恠を演じ、時としては板戸に化けたり、油壺になつたりして人を害するを本業としたかの觀がありますが、終始此鬼とは併行して、別に一派の山中の鬼があつて、往々にして勇將猛士に退治せられて居ります。齊明天皇の

七年八月に、筑前朝倉山の崖の上に踞まつて、大きな笠を著て顛を手で支へて、天子の御葬儀を附瞰して居たといふ鬼などは、此系統の鬼の中の最も古い一つである。酒顛童子にせよ鈴鹿山の鬼にせよ、惡路王大竹丸赤頭にせよ、何れも武力の討伐を必要として居ります。其他に備津の塵輪ちんりんも三穗さんぼ太郎も、鬼とは謂ひながら實は人間の最も獍猛なるものに近く、護符や修驗者の呪文だけでは、煙の如く消えてしまひさうにも無い鬼でありました。

又鬼といふ者が悉く、人を食ひ殺すを常習とするやうな兇惡な者のみならば、決して發生しなかつたらうと思ふ言ひ傳へは、自ら鬼の子孫と稱する者の、諸國に居住したことである。其一例は九州の日田附近に居た大藏氏、系圖を見ると代々鬼太夫など、名乗り、屢公の相撲の最手はてに召されました。此家は歸化人の末と申して居ます。次には京都に近い八瀬の里の住民、俗にゲラなど、呼ばれた人々です。此事に付ては前に小さな論文を公表して置きました。二三の顯著なる異俗が

あつて、誇りとして近年まで之を保持して居ました。黒川道祐などは之を山鬼の末と書いて居ます。山鬼は地方に由つて山爺のことをさうも謂ひ、眼一つ足一つだなどと謂つた者もあります、一方では又山鬼護法と連稱して、靈山の守護に任ずる活神いきがみの如くにも信じました。安藝の宮島の山鬼は、大凡我々のよくいふ天狗と、する事が似て居ました。秋田大平山の三吉権現も、亦奥山の半僧坊や秋葉山の三尺坊の類で、地方に多くの敬信者を持つて居るが、やはり亦山鬼といふ語の音から出た名だらうといふ説があります。

それよりも今一段と顯著なる實例は、大和吉野の大峯山下の五鬼であります。洞川かほといふ谷底の村に、今では五鬼何といふ苗字の家が五軒あり、所謂山上參りの先達職を世襲し、聖護院の法親王御登山の案内役を以て、一代の眉目として居りました。吉野に下市の町近くには、善鬼垣内といふ地名もあつて、此地に限らず五鬼の出張が方々にありました。諸國の山伏の家の口碑には、五流併立を説くこ

とが殆ど普通になつて居ます、即ち五鬼は五人の山伏の家であらうと思ふに拘らず、前鬼後鬼とも書いて役の行者の二人の侍者の子孫といひ、従つて又御善鬼様などと稱して、之を崇敬した地方もありました。

善鬼は五鬼の始祖のことで、五鬼の他に別に團體があつたわけでは無いらしく、古くは今の五鬼の家を前鬼と謂ふのが普通でありました。その前鬼が下界と交際を始めたのは、戦國頃からだと申します。其時代までは彼等にも通力があつたのを、浮世の少女と縁組をしたばかりに、後には只の人間になつたと謂ふ者もあります。が、実際にはごく近代になる迄、一夜の中に二十里三十里の山を往復したり、呉れると言つたら一畠の茄子を皆持つて行つたり、尙普通人を威服するに十分なる、力を持つ者の如く評判せられて居りました。

兎に角に彼等が平地の村から、移住した者の末では無いことは、自他共に認めて居るのです。是と大昔の山人との關係は不明ながら、山の信仰には深い根を持つ

て居ます。そこで此意味に於て、今一應考へて見る必要があると思ふのは、相州箱根三州鳳來寺、近江の伊吹山上州の榛名山、出羽の羽黒紀州の熊野、さては加賀の白山等に傳はる開山の仙人の事蹟であります。白山の泰澄大師などは、奈良の佛法とは系統が別であるさうで、近頃前田慧雲師は之を南洋系の佛教と申されましたが、自分は未だ其根據の何れに在るかを知らぬのであります。兎に角に今ある山伏道も、溯つて聖寶僧正以前になりますと、教義も作法も共に甚だしく不明になり、殊に始祖といふ役小角に至つては、之を佛教の教徒と認めることすら決して容易では無いのです。仙術即ち山人の道と名くるものが、別に存在して居たといふ推測も、尙同様に成立つだけの餘地があるのであります。

六

土佐では寛永の十九年に、高知の城内に異人が出現したのを、是れ山みことといふ

者だと謂つて、山中に送り還した話があります。ミコは神に仕へる女性若くは童子の名で、山人をさう呼んだことの當否は別として、少なくとも當時尙此地方には、彼等と山神との何等かの關係を、認めて居た者のあつたといふ證據にはなりません。山の神の信仰も維新以後の神祇官系統の學說に基き、名目と解釋の上に大なる變化を受けたことは、恰かも陰陽道が入つてオニが漢土の鬼になつたのと似て居ります。今日では山神社の祭神は、大山祇命か其御娘の木花開耶姫と、報告せられて居らぬものが無いといふ有様ですが、之を各地の實際の信仰に照して見ると、何としてもそれを古來の言ひ傳へとは見られぬのであります。

村に住む者が山神を祀り始めた動機は、近世には鑛山の繁榮を願ふもの、或は又狩獵の爲といふのもありますが、大多數は採樵と開墾の障礙無きを禱るもので、即ち山の神に木を乞ふ祭、地を乞ふ祭を行ふのが、此等の社の最初の目的でありました。さうして其祭を怠つた制裁は何かと言ふと、惟我をしたり發狂したり死

んだり、可なり怖ろしい神罰があります。東北地方には往々にして路の畔に、山神と刻んだ大きな石塔が立つて居る。建立の年月日人の名なども彫つてありますが、如何して立てたかと聴くと、必ず其場處に何か不思議があつて、臨時の祭をした記念なること、恰かも馬が急死すると其場處に於て供養を營み、馬頭觀音若くは庚申塔などを立てると同じく、しかも何の不思議かと問へば、大抵は山の神に不意に行逢うた、怖ろしいので氣絶をしたといふ類で、その姿はまぼろしにもせよ、常に裸の背の高い、色の赭い眼の光の鋭い、略我々が想像する山人に近く、又一方では之を山男とも謂つて居るのであります。

天狗を山人と稱したことは、近世二三の書物に見えます。或は山人を天狗と思つたと謂ふ方が正しいのかも知れぬ。天狗の鼻を必ず高く、手には必ず羽扇を持たせることにしたのは、近世のしかも畫道の約束見たやうなもので、太平記以前の色々の物語には、随分盛んに之を説いてありますが、左程鼻のことを注意しませぬ。

ぬ。佛法の解説では之を魔障とし、善惡二元の對立を認めた古宗教の面影を傳へて居るにも拘らず、一方には天狗の容貌服裝のみならず、其習性感情から行動の末までが、佛法の一派と認めて居る修驗山伏とよく類似し、後者も亦之を承認して、時としては其道の祖師であり守護神でもあるかの如く、崇敬し且つ依頼する風にあつたことは、何か隠れたる仔細のあることで無ければなりません。恐らくは近世全く變化してしまつた山の神の信仰に、元は山人も山伏も、共に或程度までは參與して居たのを、平地の宗教が段々に之を無視し又は忘却して行つたものと思つて居ります。

今と爲つては僅かに残る民間下層の所謂迷信に據つて、切れ／＼の事實の中から昔の實情を尋ねて見るの他は無いのであります。一つの例を擧げて見ますれば、山中には往々魔所と名くる場處があります。京都近くにも幾つかありました。入つて行くと色々の奇恠があるやうに傳へられ、従つて天狗の住家か、集會所の如

く人が考へました。その奇恠といふのは何かと謂ふと、第一には天狗礫、どこからとも無く石が飛んで来る。但し通例は中つて人を傷けることが無い。第二には天狗倒し、非常な大木をゴッシン／＼と挽き斫る音が聴え、程無くえらい響を立て、地に倒れる。しかも後に其方角に行つて見ても、一本も新たに伐つた株などは無く、勿論倒れた木なども無い。第三には天狗笑ひ、人数ならば十人十五人が一度に大笑ひをする聲が、不意に閑寂の林の中から聴える。害意は無くとも人の膽を寒くする力は、却つて前二者よりも強かつた。其他に稍遠くから実験したも
 のには、笛太鼓の囃しの音があり、又喬木の梢の燈の影などもあつて、實は其作者を天狗とする根據は確實で無いのですが、天狗で無ければ誰がするかといふ年來の速断と、天狗ならばし兼ねないといふ遺傳的類推法を以て、別に有力なる反對者も無しに、後には斯うして名稱にさへ爲つたのであります。

しかも必ずしも魔所と謂はず、又有名な老木などの無い地にも、やはり同様の

奇恠は折々あつて、或者は天狗以外の力として之を説明しようとした。例へば不思議の石打ちは、久しく江戸の市中にさへ之を傳へ、市外池袋の村民を雇入れると、氏神が惜んで此變を示すなども謂ひました。又伐木坊(キリキバウ)といふ恠物が山中に住み、毎々大木を伐倒す音をさせて、人を驚かすといふ地方もあり、狸が化けて此惡戯をするといふ者もありました。深夜に色々の物音がきこえて、所在を尋ねると轉々するといふのは、廣島で昔評判したバタノゝの恠、又は東京でも七不思議の一つに算へた本所の馬鹿囃子の類です。單に一人が聴いたといふのなら、おまへはどうかして居ると笑ふ所ですが、現に二人三人の者が一所に居て、あれ聴けと言つて顔を見合せる類の、所謂ファルシナシオン・コレクティブである爲に、迷信も亦社會化したのであります。

私の住む牛込の高臺にも、やはり頻々と深夜の囃子の音があると申しました。東京のはテケテンといふ太鼓だけですが、加賀の金澤では笛が入ると、泉鏡花君は

申されました。遠州の秋葉街道で聴きましたのは、この天狗の御膝元に居ながら之を狸の神樂と稱し、現に狸の演奏して居るのを見たときへ謂ふ人がありました。近世謂ひ始めたことと思ひますが、狸は最も物真似に長ずと信じられ、獨り古風な腹鼓のみに非ず、汽車が開通すれば汽車の音、小學校の出來た當座は學校の騒ぎ、酒屋が建てば杜氏の歌の聲などを、眞夜中に再現させて我々の耳を驚かして居ます。しかもそれを狸のわざとする論據は、皆がさう信ずるといふ事實より以上、一つも有力なものは無かつたのです。

此等の現象の心理學的説明は、恐らくさして困難なものでありますまい。常は聴かれぬ非常に印象の深い音響の組合せが、時過ぎて一定の條件の下に鮮明に再現するのを、其時又聴いたやうに感じたものかも知れず、社會が單純で人の素養に定まつた型があり、外から攪亂する力の加はらぬ場合には、多數が一度に同じ感動を受けたとしても、少しも差支へは無いのであります。問題はたゞ其幻覺の

種類、之を實驗し始めた時と場處、又名けて天狗の何々と稱するに至つた事情であります。山に入れば屢々脅かされ、さうで無い迄も豫め打合せをせずして、山の人の境を侵すときに、我と感ずる不安の如きものと、山に居る人の方が山の神に親しく、農民はいつ迄も外客だといふ考とが、永く眞價以上に山人を買ひ被つて居た、結果では無いかと思ひます。

七

そこで最終に自分の意見を申し上げますと、山人即ち日本の先住民は、最早絶滅したと云ふ通説には、私も大抵は同意してよいと思つて居りますが、彼等を我々の謂ふ絶滅に導いた道筋に付てのみ、若干の異なる見解を抱くのであります。私の想像する道筋は六筋、其一は歸順朝貢に伴ふ編貫であります。最も堂々たる同化であります。其二は討死、其三は自然の子孫断絶であります。其四は信仰界を通つ

て、却つて新來の百姓を征服し、好條件を以て行く／＼彼等と併合したもの、第五は永い歲月の間に、人知れず土著し且つ混淆したものの、數に於ては是が一番に多いかと思ひます。

斯ういふ風に列記して見ると、以上の五つの何れにも入らない差引殘、即ち第六種の舊狀保持者、と謂ふよりも次第に退化して、今尙山中を漂泊しつゝあつた者が、少なくとも或時代迄は、必ず居たわけだといふことが、推定せられるのであります。ところが此の第六種の狀態に在る山人の消息は、極めて不確實であるとは申せ、つひ最近になる迄各地方獨立して、隨分數多く傳へられて居りました。

それは隱者か仙人かであらう。いや妖怪か狒々か又は馱法螺かであらうと、勝手な批評をしても濟むかも知れませぬが、事例は今少しく實著で且つ數多く、又其様にまでして否認をする必要も無かつたのであります。

山中殊に漂泊の生存が、最も不可能に思はれるのは火食の一點であります。一旦其便益を解して居た者が、之を抛棄したといふことは有得ぬやうに思はれますが兎に角に孤獨なる山人には火を利用した形跡なく、しかも山中には虫魚鳥小獸の外に、草木の實と若葉と根、又は菌類などが多く、生で食つて居たといふ話は澤山に傳へられます。木挽炭燒の小屋に尋ねて來て、黙つて火にあたつて居たといふ話もあれば、川蟹を持つて來て燒いて食つたなどとも傳へます。鹽はどうするかといふ疑の如きは疑にはなりません。平地の人の如く多量に消費しては居られぬが、日本では山中に鹽分を含む泉至つて多く、又食物の中にも鹽氣の不足を補ふべきものがある。又永年の習性で其需要は著しく制限することが出來ました。吉野の奥で山に遁げ込んだ平地人が、山小屋に鹽を乞ひに來た。一握みの鹽を悦んで受けて、此だけあれば何年とかは大丈夫と謂つた話が、羈旅漫録かに見えて居りました。

それから衣服でありますが、是も獸皮でも樹の皮でも、用は足りたらうと思ふに

拘らず、多くの山人は裸であつたと謂はれて居ります。恐らくは裸體である爲に人が注意することに爲つたのでしようが、我國の溫度には古今の變は少なからうと思ふのに、國民の衣服の近世甚だしく厚くなるしくなつたのを考へますと、馴らせば無しにも起臥し得られて、此點はあまり顧慮しなかつたものと見えます。不思議なことには山人の草鞋と稱して、非常に大形のもを山中で見かけるといふ話がありますが、それは實用よりも何か第二の目的、即ち南日本の或海岸の村で今でも大草履を魔除けとする如く、彼等獨特の畏嚇法を以て、成るべく平地人を廻避した手段であつたかも知れませぬ。

交通の問題に付ても少々考へて見ました。日本は山國で北は津輕の半島の果から南は長門の小串の尖まで、少しも平野に下り立たずして往來することが出来るのでありますが、彼等は必要以上に遠くへ走るやうな、餘裕も空想も無かつたと見えて、居るといふ地方にのみいつでも居りました。全國の山地で山人の話の特に

多い處が、近世では十數箇處あつて、互ひに隔絶して其間の聯絡は絶えて居たかと思はれ、氣を付けて見ると少しづつ、氣風習性の如きものが違つて居ました。今日知れて居る限の山人生息地は、北では陸羽の境の山であります。殊に日本海へ近よつた山群であります。それから北上川左岸の連山、次には只見川の上流から越後秋山へかけての一帶、東海岸は大井川の奥、次は例の吉野から熊野の山、中國では大山山彙などが列擧し得られます。飛驒は山國でありながら、不思議に今日は此話が少なく、青年の愛好する北アルプスから立山方面、黒部川の入なども今はもう安全地帯のやうであります。之に反して小さな離島でも、屋久島は今尙痕跡があり、四國にも九州にも勿論住むと傳へられます。四國では劍山の周圍殊に土佐の側には無数の話があり、九州は東岸にやゝ偏して、九重山以南霧島山以北一帶に、最も無邪氣なる山人が住むと謂はれて居ります。海が彼等の交通を遮斷するのは當然ですが、尙少しは水を泳ぐことも出来ました。山中には固より

東西の通路があつて、老功なる木樵獵師は容易に之を認めて遭遇を避けました。夜分には彼等も随分里近くを通りました。其方が路が樂であつたことは、彼等とても變りは無い筈です。鐵道の始めて通じた時は嘸驚いたらうと思ひますが、今では隧道なども利用して居るかも知れませぬ。火と物音にさへ警戒して居れば、平地人の方から氣が付く虞は無いからであります。

山男山姥が町の市日に、買物に出ると云ふ話が方々にありました。果してそんな事があつたら、衣服風體なども目に立たぬやうに、濟まして只の田舎者の顔をすゝるのだから、山人としては最も進んだ、直ぐにも百姓に同化し得る部類で、言はゞ一種の土著見習生の如きものであります。其以外には力めて人を避けるのが寧ろ通例で、自分の方から來るといふはよく／＼の場合、即ち單なる見物や食物の爲では無かつたらしいのです。しかも人類としては一番強い内からの衝動、即ち配偶者の欲しいといふ情は、往々にして異常の勇敢を促したかと思ふ事實があります。

尤も山人の中にも女はあつて、族内の縁組も絶対に不可能では無かつたが、人が少なく年が違ひ、久しい孤獨を忍ばねばならぬ際に、堪へ兼ねて里に降つて若い男女を誘うたことも、稀では無かつたやうに考へます。神隠しと稱する日本の社會の奇現象は、餘りにも數が多く、其中には明白に自身の氣の狂ひから、何と無く山に飛込んだ者も少なくないのですが、原因の明瞭になつたものは曾て無いので、しかも多くは還つて來ず、一方には年を隔て、山中で行逢うたといふ話が、決して珍しくは無いから、斯ういふ推測が成立つのであります。世中が開けてからは、假に著しく其場合が減じたにしても、物憑き物狂ひがいつも引寄せられるやうに、山へ山へと入つて行く暗示には、千年以前からの潜んだ威壓が、尙働いて居るものと見ることが出來ます。

それを又他の方面から立證するものは、山人の言語であります。彼等が物を言つ

たといふ例は、殆ど無いと謂つてよいのであるが、平地人の所謂日本語は、大抵の場合には山人に理解せられます。随分と込入つた事柄でも、呑込んで其通りにしたと云ふのは、即ち片親の方から其智識が、段々に注入せられて居る結果かと思ひます。それで無ければ米の飯をひどく欲しがり又焚火を悦び、屢々常人に對して好意と迄は無くとも、ちつと目送したりする程の、平和な態度を執つたといふ話が解せられず、殊に頼まれて人を助け、市に出て物を交易するといふだけの變化の原因が想像し得られませぬ。多分は前代に在つても最初は同じ事情から、耕作の趣味を學んで一地に土著し、僅かづゝ下流の人里と交通を試みて居るうちに、自他ともに差別の觀念を忘失して、乃ち武陵桃源の發見とはなつたのであらうと思ひます。

之を要するに山人の絶滅とは、主としては在來の生活の、特色の無くなることでありました。さうして山人の特色とは何であつたかといふと、一つには肌膚の色の赤いこと、二つには丈高く、殊に手足の長いことなどが、昔話の中に今も傳説せられます。諸國に數多き大人の足跡の話は、話となつて極端まで誇張せられ、加賀ではあの國を三足であるといふ大足跡もありますが、もとは長髓彦若くは上州の八掬脛(ヤツカハギ)ぐらゐの、稍我々より大きいといふ話では無かつたかと思はれます。北歐羅巴では昔話の小人といふのが、先住異民族の記憶の斷片と解せられて居ますが、日本はちやうど其反對で、現に東部の弘い地域に亘り、今以て山人のことを大人と呼んで居る例があるのです。私は他日此問題が今少し綿密に學界から注意せられて、單に人類學上の新資料を供與するに止らず、日本人の文明史に於て、まだ如何にしても説明し得ない多くの事蹟が、此方面から次第に分つて來ることを切望いたします。殊に我々の血の中に、若干の荒い山人の血を混じて居るかも知れぬといふことは、我々に取つては實に無限の興味であります。

問題及書名索引表

○問題は將來成長すべしと思ふものを列舉し○書物は比較的重要なる半
數に止めた○括弧を附けたのが書名其中*符あるは郷土研究社刊行の爐
邊叢書に屬する○數字は頁數であるが若干の脱落を免れない

<p>ア アイツ小僧 一九</p> <p>アイヌ語 一六</p> <p>赤い顔 一三〇、一三五、一四四、一三四</p> <p>赤兒を抱かされる 一三四</p> <p>秋葉權現 一五、一四</p> <p>足跡の砂 一三二</p>	<p>足柄山 一四三</p> <p>足を引つばられた 一七〇</p> <p>阿蘇の那羅延坊 一五三</p> <p>小豆とき 一三三</p> <p>小豆飯 八四、九三、一四四</p> <p>姉と妹 一六三</p> <p>阿波(アバ)の大杉大明神 一七〇</p> <p>「阿波國不朽物語」 一七〇</p>
---	--

油とり
天津罪國津罪
天のじやく
荒乳山由來譚
青麻(アヲソ)權現

イ

「有斐齋劄記」
幽冥道の研究
生靈と死靈
石打ちの恠
異人種同化
異人を夢む

三七
三七
二四
二四
一四一
六九
一三三
六
一〇九
一〇七、二七五
一三三、三〇六、二七七
一三九

偉大なる足跡
市に出る山男
イチ女とイチ神
「二話一言」
一本足
犬
岩長姫命
岩屋
茨木童子
入らず山
衣料の變遷
色が赤い
色が黒い

二八八
一三三、一三六、二三四
一九九、三八二
一四九
八〇
三三六、三三三
三三、一三八、二二三
一三七
三三、六六、一三三、三三三
一三三
二二八
六、一七七、三八〇
一九三、二一一
一七六、一八二、一八四

ウ

浮橋
牛鬼
牛のやうな聲
白
菟道弓(ウヂユミ)
産衣を山神に贈る
産女(ウブメ)の恠
産湯の水
馬の神
運送を助ける
魚を捕る

一三八
一三三
一七六
二七、三八、二四六
一五九
一三六
一三三
一三三、一四四
一七、二三五
一八三
五、一九九、二〇八

エ

「越後野志」
「越後名寄」
「越人關弓録」
榎木
エビスと市
オ
老いたる山人
「翁草」
沖繩の例
奥淨瑠璃

一六三、三三三
一三三
二二三
一三三
二〇一
一七〇
七三
四五、九一
七三
二八九

御産立(オコダテ)の神事 一四七
 御善鬼様 二六九
 「落穂餘談」 二〇三
 おとら狐 六三、八三
 オニ 一〇二、一〇八、二四六、二六六
 鬼子を産む 一一八
 鬼太夫と相撲 二五二
 鬼の足跡 二三五
 鬼の子孫 二六七
 狼 三二、一四六、一五五
 大鳥一兵衛 二三四
 大話 二二七
 大人(オホヒト) 一〇七、一八三、二六六、二四四、二八五

大人の簀(アシカ) 二九〇
 大人の蓑笠 二四六
 大人彌五郎 二三八
 親に似ぬ子 一一八
 オラバオ〜 八九
 カ
 高野聖 三九
 高麗茶碗と山男 二〇二
 鏡とき 六
 書置の事 一一〇
 鈎曳の神事 一五一
 隠し神 三六、九〇

隠れ座頭 三八
 隠れた通路 七、二〇九、二八二
 隠れんぼ 三五
 片足神 二二六、二二六、二二三
 風吹く日 九
 鍛冶屋の力 一三三
 「甲子夜話」 二二三
 合戦を談る 六、八二
 「嘉津間答問」 五
 鉦太鼓 三三、八
 川童カツパと相撲を取る 二四九
 神送りの日 四
 神隠し 三三、八五、二二八、二八三

神婚姻 三五、一四二
 神様松 九
 神と別れる 二四
 神の御兒 二二、二二七、二四一、二五〇
 神を助ける 一四〇
 神を山から迎へる 二六五
 髪の毛が赤い 二〇、一七五、一九四
 かやせ戻せ 三三、八
 烏天狗 一〇五
 狩之卷秘傳 一三八
 獵人 一七、二二、二二八、二四二、二四九、二六三
 キ 二九一

問題及書名索引表

「奇異雜談集」 一三〇
「笈埃隨筆」 三二
「九桂草堂隨筆」 九
「宮川舍漫筆」 七九
「義經記」 七三、一四一
氣質の特徴 四〇、六三、三五
狐 三三、四、七九
樹の皮を著る 一九
木の子 一五四
樹の下に 四三、九、一六
行者 二、五、三三
狂女山に入る 一九、一〇五
伐木坊(キリキバウ) 三二

「霧島山幽界眞語」 二九二
「羈旅漫錄」 三二
ク
空中飛行 四、七
國樞人(クズビト) 二五九
國栖の奏 二六三
口が耳まで 一三〇、一六
口が臭い 一八四
唇が反つて居る 一六
杳掛の習俗 二五
九頭龍權現 一三
國がら 一三、一六、三三、二八三

國魂郡魂 二五七
國つ神 二六
鍬 二四
グヒンサン 三三、八九、一〇七
熊野の移民 七二
「臥雲日件録」 六三、一四
觀惠交話 一五四

獸を逐ふ山女 一五八
ゲラ 二六
現世地獄譚 四
建長寺の貉僧 七六
「玄同放言」 一三〇

ケ
「慶長見聞集」 一三七
下駄 四三、七
毛だらけの體 四四、一五、一八四
獸の皮 六、一七

コ
小市と母 一五〇
「幸安仙界物語」 一六
「廣益俗説辯」 一七
瀬瀬城の話 一七
弘法大師と姥 一四〇
五鬼 二六八

「黒甜瑣語」 四、一五、一七〇
 穀物の味 一五、一九、二四一
 苔を採る 一八二
 「古語拾遺」 二五七
 心直くなる者 一四七
 子育ての守り 一三六
 言葉のなまり 二〇〇
 子供 二、三六、二五、一九九
 子取りの尼 三六
 木花開耶姫命 一三七、七〇一
 木葉の衣 六、六六、一〇〇、一四四、三三八
 御幣餅又は五兵衛餅 一九〇
 護法天狗 一〇七、二二、二四二、二六八

婚姻の神祕 二九四
 コンコンチキチ 二五、一六
 「今齊諧」 一五八、三三、三三八
 「今昔物語」 三〇、一〇三、一三四、一九四、二六六
 米の飯 一五、一八七、二四三、二八四
 五流の山伏 二六八

サ
 「想山著聞奇集」 一九〇
 「相州内郷村話」* 七五
 草履を留む 九六、二二三
 賢木(サカキ)と山人 二六四
 逆さ水 二四六

坂田公時 一四、三三三
 酒買ひ 九七、二〇三
 酒を好む山人 一八六
 座頭 三八、七三
 サトリといふ怪物 一〇八、一八六、二四〇
 澤蟹を焼いて食ふ 一七三
 鯖と民俗 九
 佐伯氏 二六二
 道祖札(サヘノタワ) 一三
 サンカは逸民 六
 山鬼と三吉権現 二二、二六
 産後の女 三
 山神の母 一三六

山賊の棟梁 一〇四
 山中の赤兒 一四〇、一五
 山中の異人 六、一六、一九四、三二
 山中の交易 三三〇
 残夢和尚 六
 猿の如し 三三、一八八
 猿掣入譚 二七、二六

シ
 「周遊奇談」 一八三
 時代の解釋 一三、五三、一〇四
 下帯無し 一八四
 「視聽實記」 一九

問題及書名索引表 二九五

黍シトギ	四、二五、一九	守鶴西堂の天目	八二
信濃奇勝録	三三	種族絶滅の意味	二六〇
芝天(シバテン)	二四九	酒顛童子	一〇三、一三三
十二段の草子	一四三	狩獵生活	一五、三三
十王の申し兒	一三五	「蕉齋筆記」	七
鹽	一八五、七九	菖蒲と蓬	二九、三一、三四
「鹽尻」	一八、六	食物と神	九〇、三四三
深山の誕生	一三、四三	白髪 <small>の山男</small>	一七、一九、一九
神子昇天譚	一三七	白髭水	二四
神童の談話	三	白山姫神	一四二
人狼譚	一四	「四鄰譚叢」	二四
新羅王の書	八四	白石翁	七〇
杓子と山の神	一三六	白い石を焼いて食はず	三四〇、三四

白餅 四
字を書く癖 七、八

ス 三
角力の起原 三五〇

墨壺を欲しがる 一四

炭焼き 一四、一〇一、三三
「駿河國新風土記」 一五

セ 六
「清悦物語」 六

背が高い 一三、一五、三五、七二
「西讃府志」 三三

問題及書名索引表

「西播佐談實記」 九

「西遊記」 一五、一八

寂寞の威壓 一、二、六

セコ子 一五

「雪窓夜話」 二、一七

「攝陽群談」 一四

「仙界眞語」 五

前鬼後鬼と先達職 二六

「前太平記」 一四

仙人 一、六〇、二五、二七〇

仙人をヤマビト 二五

「仙梅日記」 二四

ソ

「續鑛石集」
蘇民將來巨旦將來

一四〇 西

二九八

タ

大太法師
大蛇
高麥の頃
高山嘉津間
託宣と子供
狸の神樂
狸の嫁になる
狸の大和尚

二三五
一五、一六四
三五
五〇
二七六
一五
七四

チ

田の神と山の神
玉椿の花の枝
「譚海」
團子祭
誕生の奇瑞
「中古著聞集」
ちうさんかうや
力が強い
力を授かる
地主の神
地仙となる

一五二
六三
一九九
一三四
二一九
三〇
一五、二二三
一三四、二五〇
一七、二四一、二六三
七三

血とり油とり

三七

乳房

一七三

茶碗を叩く

八九

テ

低級神話なるもの

一八

「提醒紀談」

六七

敵意を持たぬ山人

一八、二八四

鐵氣の毒

二八、二三三

手孕み譚

一三

てんがら犬

一三八

天狗

一一、三、五八、一〇五、三三九、二七三

天狗倒し

一九一、二七四

天狗のカゲマ

五四、九三

天狗の酒買ひ

二〇三

天狗の通路

二〇九、二二一

天狗の磔

二一九、二七四

ツ

ツカサは巫女

一三七

「津輕舊事談」*

二四

盡きぬ寶

一三九、一四四、二〇二

憑く天狗

一〇六

土蜘蛛退治

二五九

角(ツノ)ある人

一三七

「徒然慰草」

二八

天狗の名前	二六八	「東藩野乘」	七一
天狗笑ひ	二二、二四	「東武談叢」	一九六
天神地祇	三五、三七	頭屋鍵取	三五
「傳説の下伊那」	七七	「土佐風俗と傳説」*	一五
傳統的不安	三〇、三〇、三二、三七	「土佐海續編」	二三
テンバといふ者	七	「土州淵岳志」	一五
		歳神と鬼子	一三五
ト		橡の實	九五、三四六
「東奥異聞」	一三四、一四〇	「遠野物語」	九八、二五八、三一
童貞受胎譚	二二、二七	通り物の路	二一〇
「桃山人夜話」	一八	遁世の方法	一三
童子の足跡	一四	寅吉物語	五
童子屋敷	一三	採り物	二六五

ナ

長い髪の毛	三三、二六、二七、八九	庭火の役を山人に	二六四
中の中の小坊主	五	人魚の肉	六
「南總の俚俗」	一三五	忍術の起原	三
名を知るの力	二三	女房を山の神	一三五

ニ

握り飯	一八四、三九	ネ	
ニコくくと笑ふ	三三、二八	鼠の浄土	三
ニシコリの木	一七〇	ノ	
「日東本草圖彙」	二二八	野宿	一四、一〇九、一一一
丹塗りの箭	一三	覗く	一七五、八九
		「能登國名跡志」	六
		「能美郡誌」	九一

ハ

齒が生えて産れる 一八
 「白石先生書簡」 五
 裸 一〇、三〇、一五八、三二一、三三九、三八〇
 バタ／＼の恠 三三〇、三七五
 八郎と南祖坊 一五、一八
 八百比丘尼 六
 初穂 一九
 鼻がひしげて居る 一八
 鼻の高い天狗 一〇五、二七三
 花の本の女 六
 鼻曲り地藏 七

「槃遊餘録」

一〇〇

速足

二〇八

針

二八、三三

「播磨風土記」

三三四、三六〇

ヒ

火 六、一四、一七四、三四一、三七八
 「東山往來」 一八
 髭がある 一八三、一八八
 常陸坊海尊 空
 「常陸風土記」 三三四、三五九
 人に近よる 一七〇、一七六、一九六、三三〇
 火ともし頃 六

拂(ヒヒ)

三〇、一六、二七六

平田先生

五、一〇六

フ

不思議が流行する 一九
 「不思議物語」 五
 富士筑波譚 一四〇
 「扶桑恠談實記」 一四
 二股の枝 一八
 糞の中にすゞ竹 一六、三三
 文福茶釜 八

「秉穂録」

一五八、一七四

瓢箪

二七、二〇五

屁と神隠し

四

蛇に見入られる

一六、三〇

辨慶

一九、一四一、三三六

辨當をねらふ

一五、一五五、三四三

ホ

「北越奇談」 三三
 「北越雜記」 一七九、三三九
 「北越雪譜」 一八八
 「璞屋隨筆」 四
 「本朝故事因縁集」 六

マ

猛獸の愛情 一五六
 申し兒 一三三、一三五
 枕 一三三
 孫杓子 一五五
 魔所 二〇〇、二二八、二七三
 「眞澄遊覽記」 一六六、二〇九
 榊を叩く 八九
 マタギ 一五五、一四〇
 マダの樹の皮 一七五、二二五、二四三
 町へ出て来る山人 一三三、二〇〇
 迷ひ子 三三三、四〇〇、八八

まぼろし

三五

「幻の島より」

一七、一四〇

萬次萬三郎

二二六、二八〇

ミ

魔よけの大草鞋 二二六、二八〇
 見入られる 一六六
 「視聽草」 二〇〇
 道の神は女性 一三三、一六三
 三峯山の狼 一四七
 身の運と身の力 六八、一三五、二五〇
 耳の迷ひ 二〇八、二二九、二七五
 三輪式神話 三五、一三一

山ム

山ム
 昔話 二六、二二五、二四〇、二四八、二六三、二八五
 昔話の方式 七三
 無口になる 一一
 無言貿易 二二〇、二四五
 貉の書畫 七五
 虫を食ふ 一九、三三、一九六
 眼が青く光る 三〇
 眼が一つ 一五四、二五三
 眼が三つ 一三〇

盲法師の話

五五、六九

飯櫃を指さす

一八九

眼一つ足一つ

二三三、二六八

モ

目送する 一七九、二八四
 餅 九五、一三五、一九〇、二四三、二四七
 物言はず 三三、一〇〇、一八八、一九七、二三八
 物語と長命と 七一
 物狂ひ 一九、五一
 物を言ふ山人 一六一、一七一、二〇四

メ

焼飯を欲しがる 一八九
 約束と信仰 八六、一五三、二一八、二五〇
 屋久島の鬼子 一九九
 彌十郎 二四四
 夜叉池の夜叉御前 三五
 八瀬の里人 二六七
 ヤドウカ 六
 傭はれる山男 一八三
 柳の枝 一三〇
 山姥 一三九、一四四、一五七、三三三
 山姥の帷子 二〇三
 山姥のカモジ 一七三
 山姥の沓 二二四

山姥の徳利 二〇一
 山姥のヲツクネ 一九九
 山大人 二三八
 山が荒れる 一九一、二三〇
 山かか、山母 二四四
 山小屋 一、三〇、一四八、一七六、二二三
 山小屋餅 一九一
 山丈(ヤマジヨウ) 一六七、二二四
 山住神社と御犬 一四六
 山爺、山父 一〇八、一七五、三三三
 山と産育 二二三、二六六
 山の神 一七、三〇、〇七、一五九、一九〇、二一一、三三三、三七一
 山の神一本足 二二六

山の食物 五、一五、二七九
 山の嫉妬 二四
 山人といふ語 二五七、二六五
 山人生息地 二八一
 山人絶滅の六原因 二七七
 山姫 二〇、一五七
 山伏姿 六七、一〇七、一七四、二七三
 山みこ 一九七、二七〇
 山童と川童 一五三
 山男 一〇一、一六三、一八五、三三一、三四三
 山男と相撲をとる 二四四
 山女 一五八、一六九

ユ
 遊戯の起原 三五、五一
 行逢祭 一四一
 雪の上の大足跡 一四四、三六、三三一
 指が無いといふ例 一九六
 夢 一一〇、一九九
 硫黄山 二三四
 ヨ
 容貌魁偉 一三六
 よく無い處 三四、三三〇
 呼ばゝり山 八七
 因童(ヨリワラハ) 五一

ラ
良辨僧正 一〇三
「老嫗茶話」 一七三
リ
「龍章東國雜記」 一七三
龍蛇の掣 五三、一六
ワ
黄金の囊 一三四
王子の狐の話 二七、八〇
若宮御前 二一、一五〇、二五三

驚に取られた子 三〇八
わなにかゝる山女 一〇三
笑ひ男 一五五
中
「遺老説傳」 一三七
ヲ
桶屋と天狗の話 一〇八
「小谷口碑集」* 一四
斧 二、一九一、三〇
小野氏 六
女長命の口碑 六三、一〇〇

大正十五年十一月十一日印刷 山の人生
大正十五年十一月十五日發行 定價金貳圓

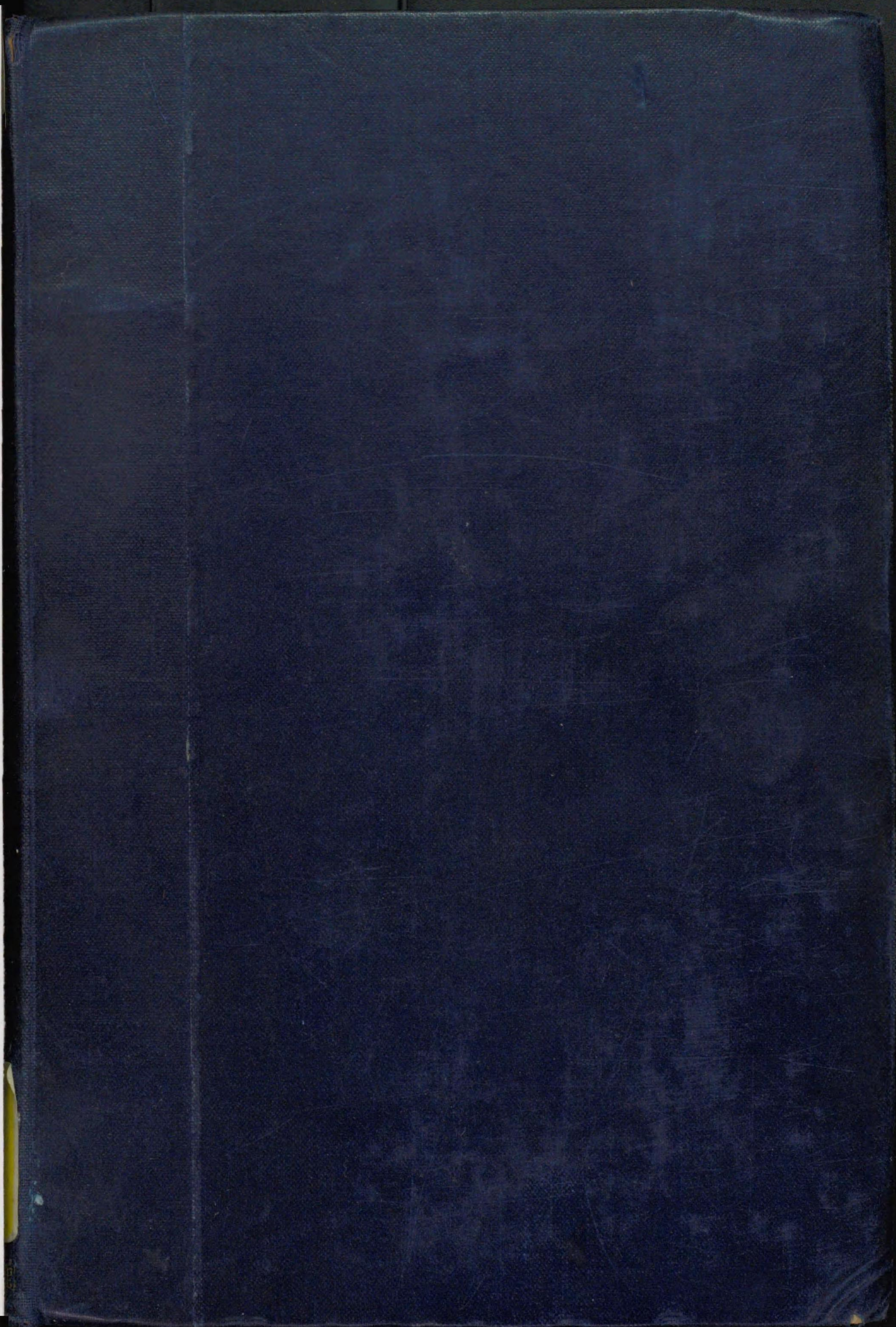
著作者 柳田國男
發行者 東京市小石川區茗荷谷町五十二番地 岡村千秋
印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 根本力三

發行所 東京市小石川區茗荷谷町五十二番地 郷土研究社
振替口座東京二二九九一七番

刷印舎英秀社會式株

Handwritten text on a small white label with a decorative border, located in the top left corner of the left page.

556
157

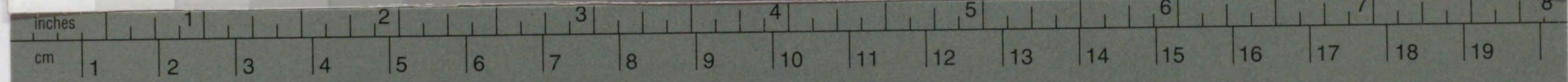


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

